# 正倉院（二）

岩波写真文庫　56

# 岩波写眞文庫 56 正倉院（二）


監修 和田軍一
編集 岩波書店編集部
写眞 宮内廳書陵部


正倉院展（奈良博物館）

## はじめに

正倉院の曝涼（ばくりょう）——それは奈良の秋、美術の秋のなつかしい年中行事である。近年、年ごとに開かれる正倉院展によって、その宝物の姿は國民に知られてはきたものの、宝庫内部の様子は多くの人の憧憬である。また開封とはどのようなことか。曝涼とはどのようなことをするのか。宝物はどのように陳列せられ保存されているか。勅封はどのように付けられるのか。これらのことは正倉院の名を識る者が知りたいことどもだが、國民はそれを眼に愬（うった）えて知らされたことは曾てない。わが國最高の文化財である正倉院も國民の理解と協力とによって保護せられなければならない時に当って、宮内廳の好意によってそれらのことは、はじめて國民の前に明らかになった。

目次


開封……………… 2
曝涼……………… 6
北倉………………14
中倉………………28
南倉………………42
調査………………55



定価100円 1952年 2月20日第1刷発行 1959年1月20日 第7刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店


## 宝庫平面図

南倉（P42－P53参照）

階下：南棚、西棚、中棚、北棚
階上：南棚、西棚、中棚、北棚

中倉（P28－P41参照）

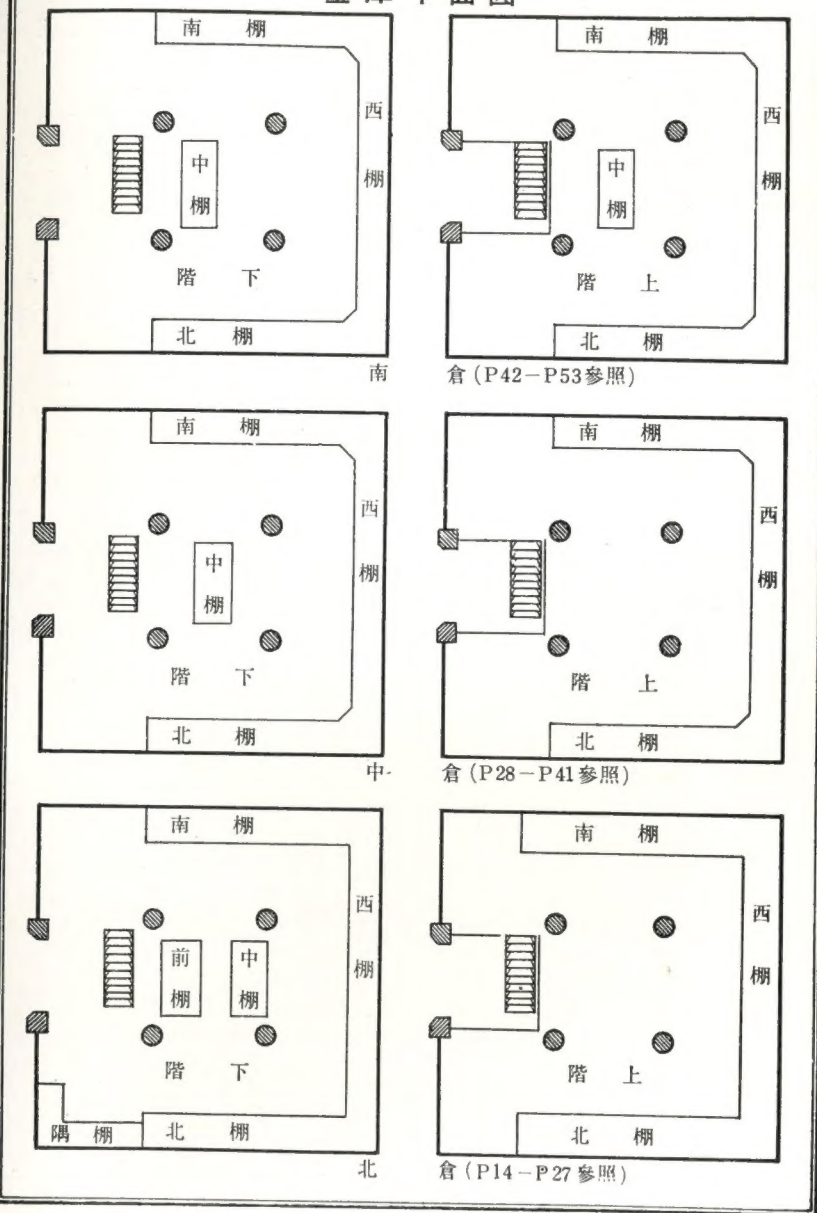
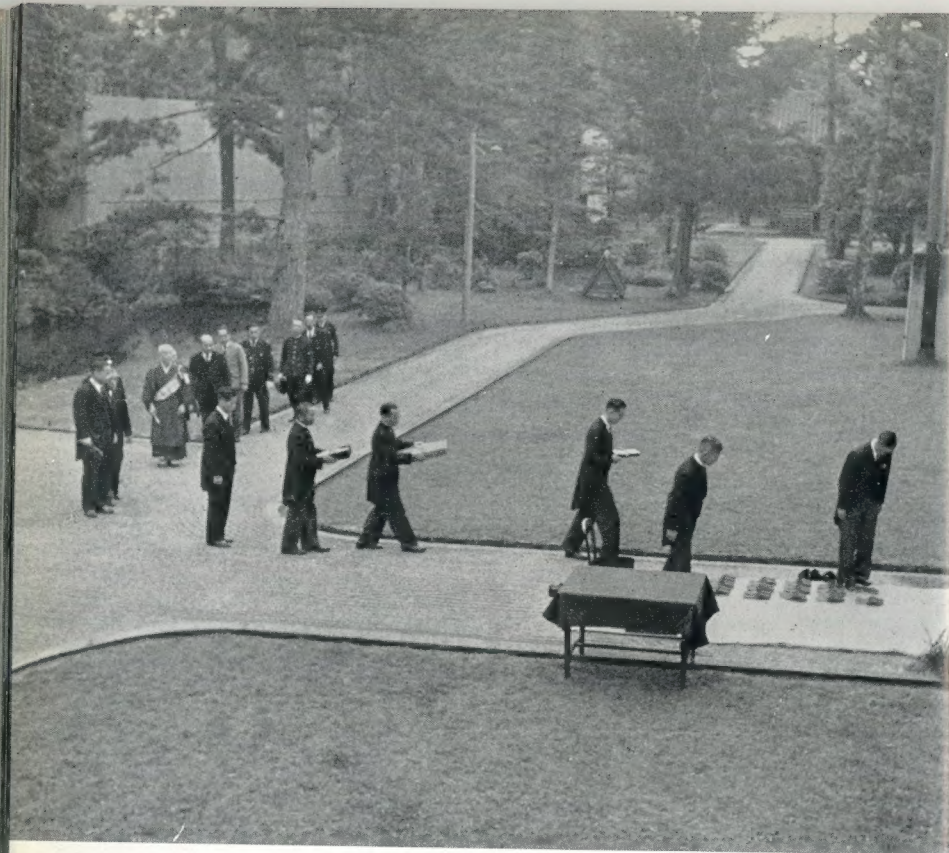
階下：南棚、西棚、中棚、北棚
階上：南棚、西棚、北棚

北倉（P14－P27参照）

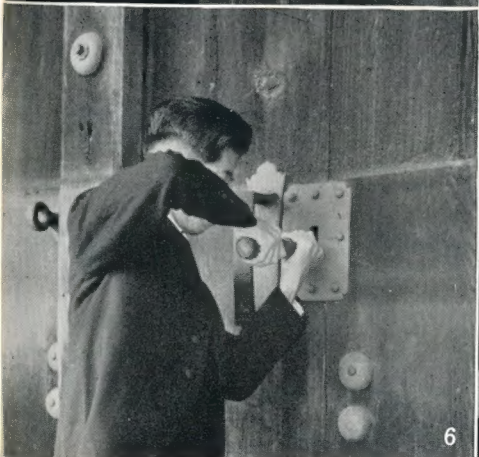
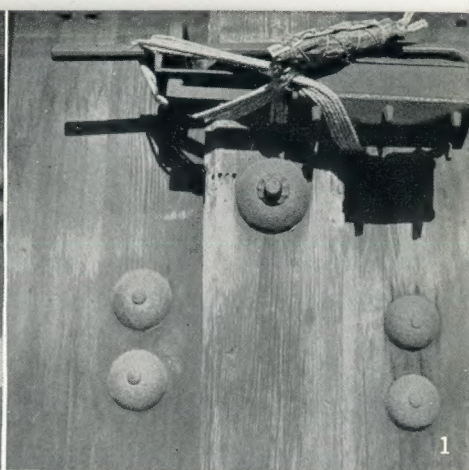
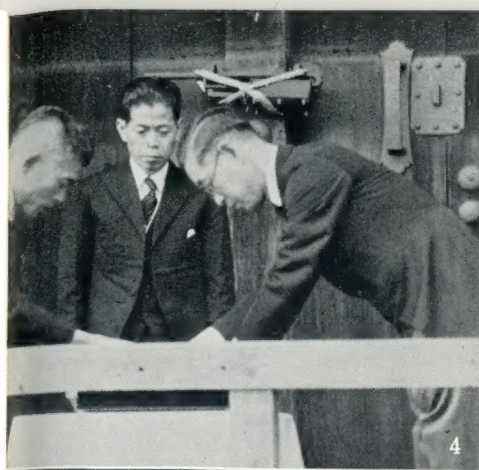
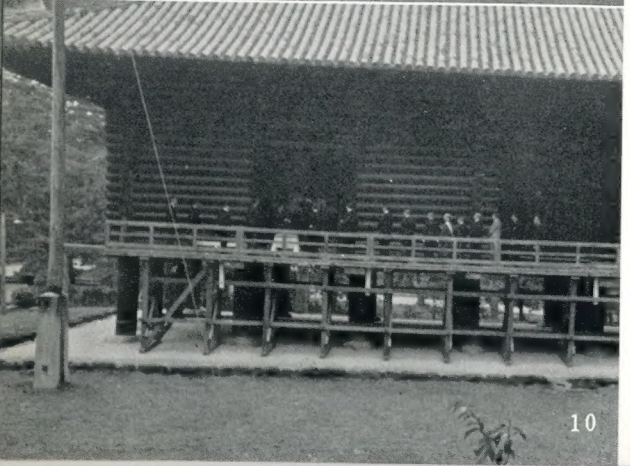
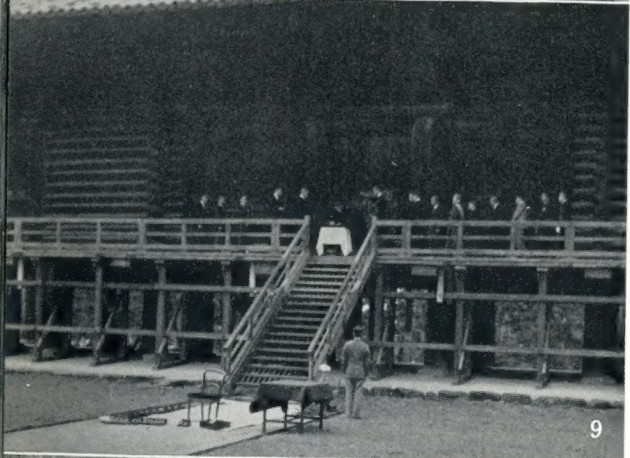
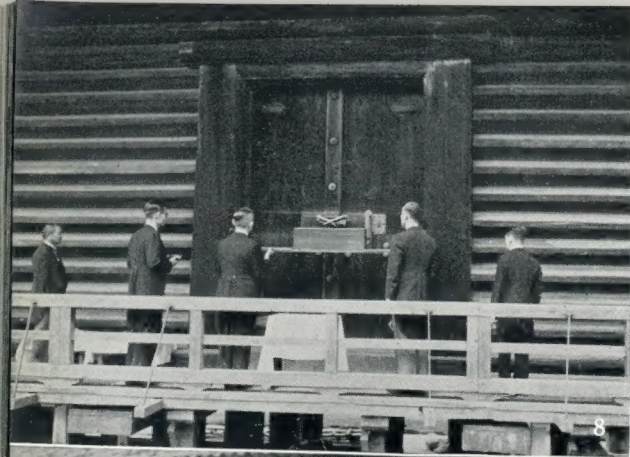
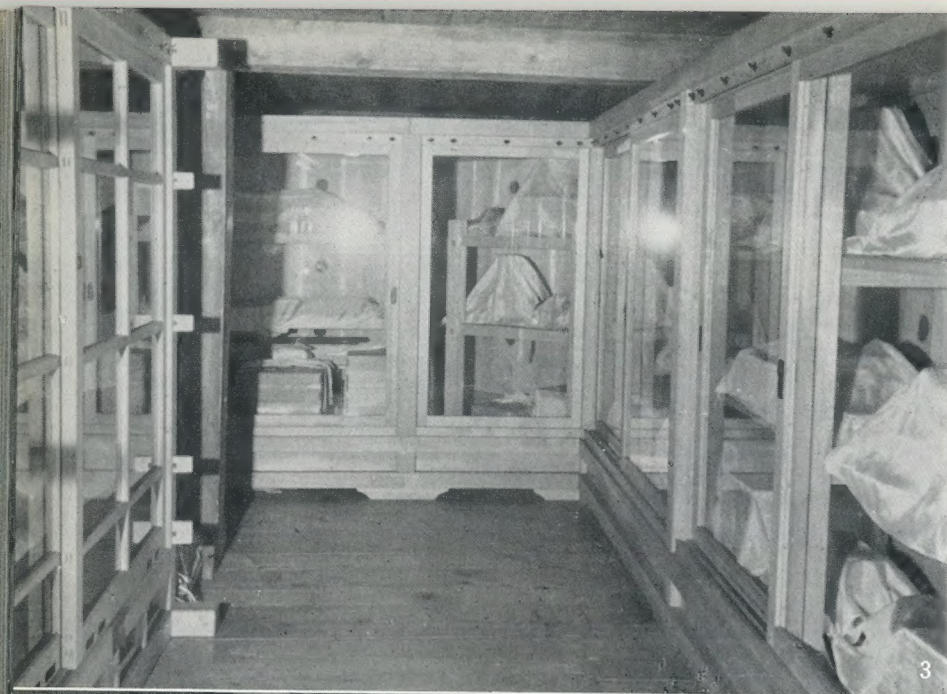
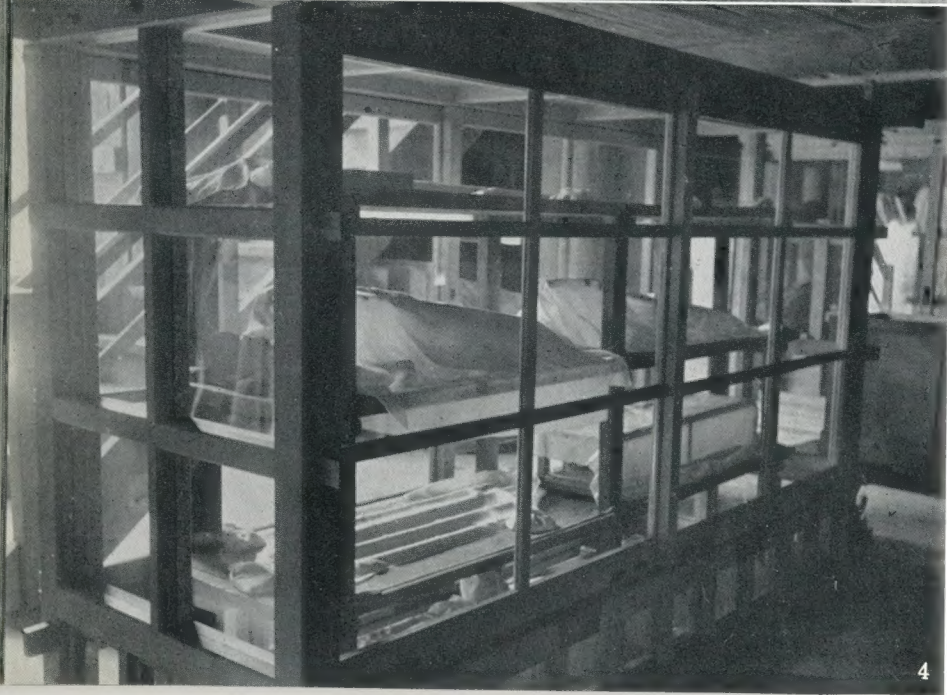
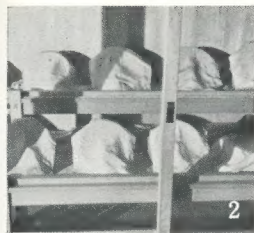
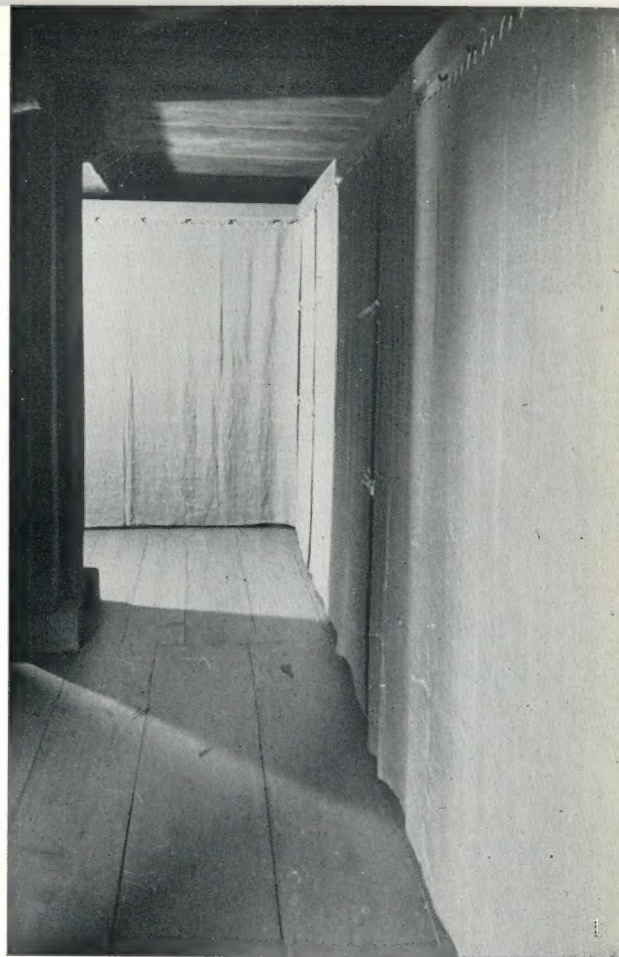
階下：南棚、西棚、前棚、中棚、北棚、隅棚
階上：南棚、西棚、北棚

① すがすがしい白砂の道を進む御蔵開きの一行.

## 御開封

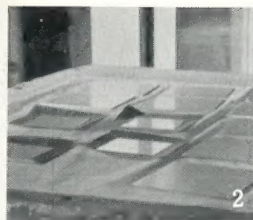
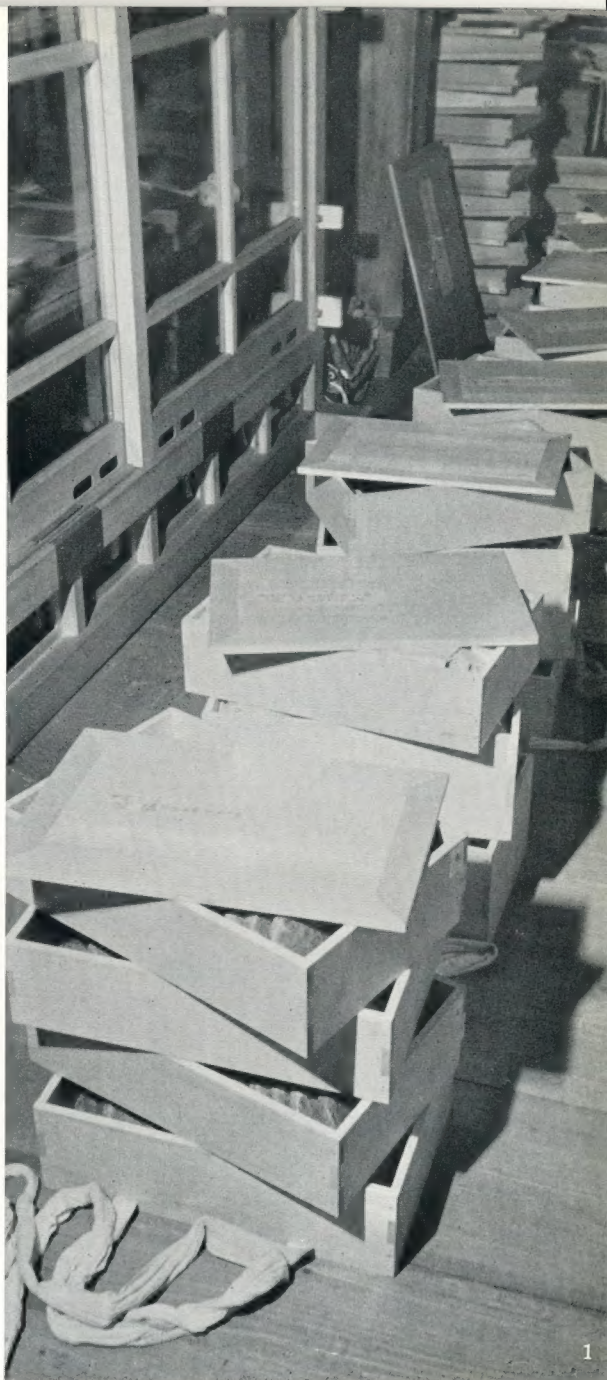
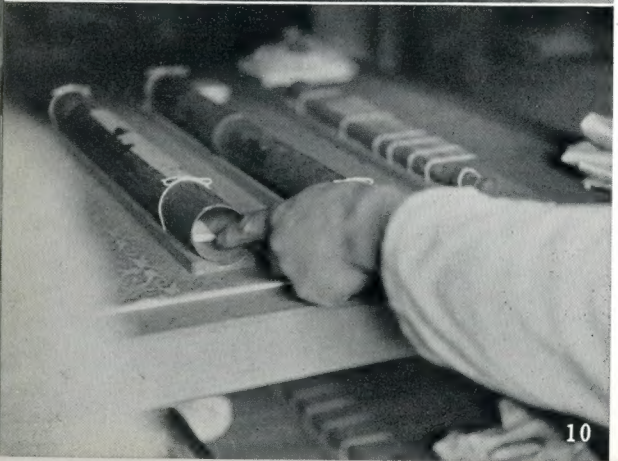
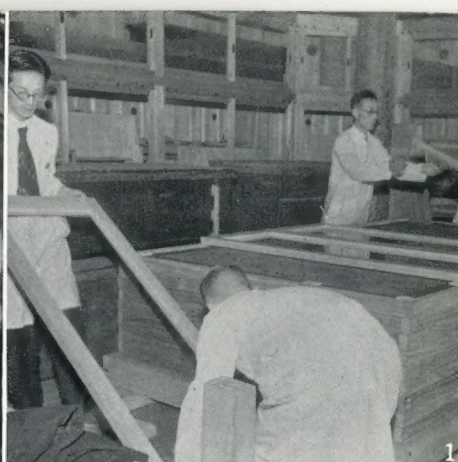
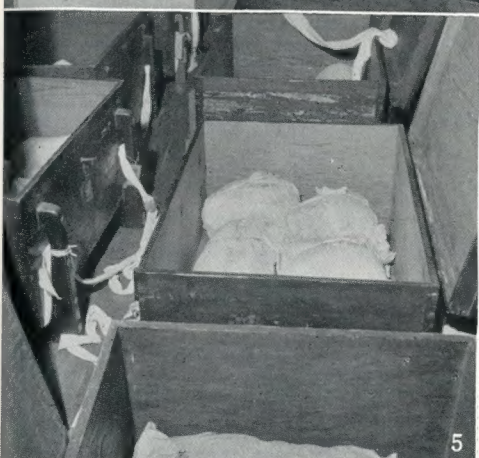
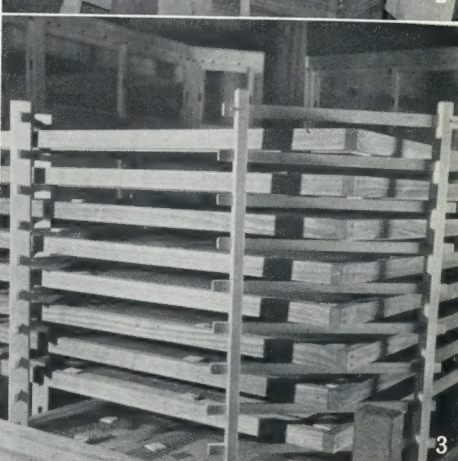
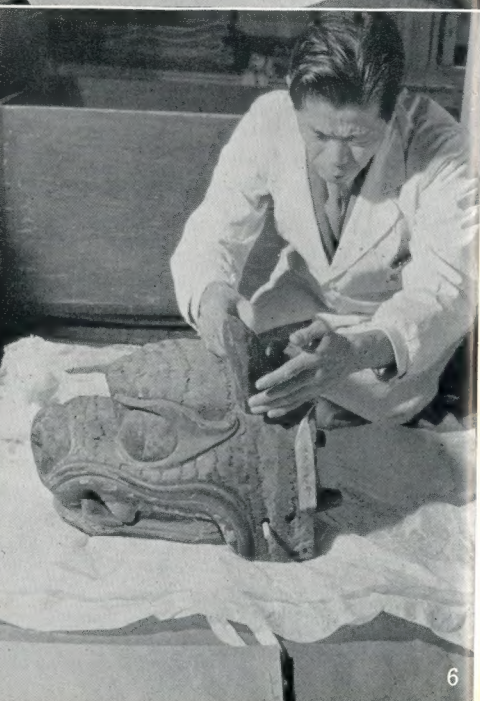
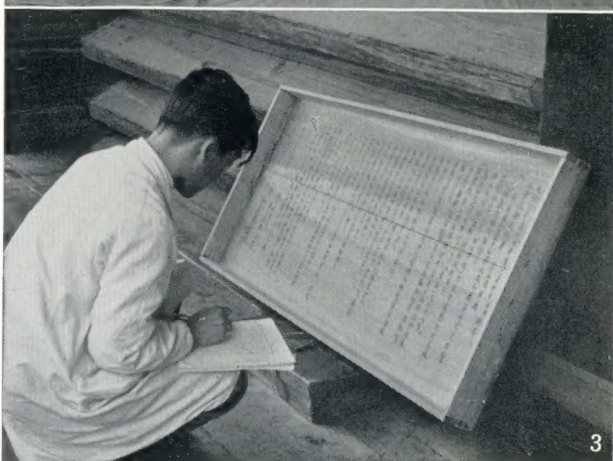
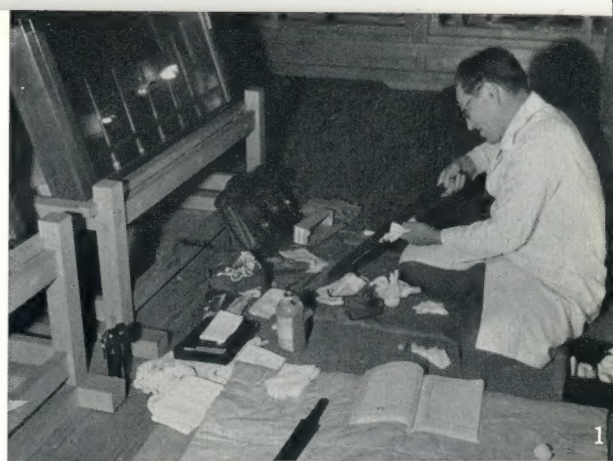
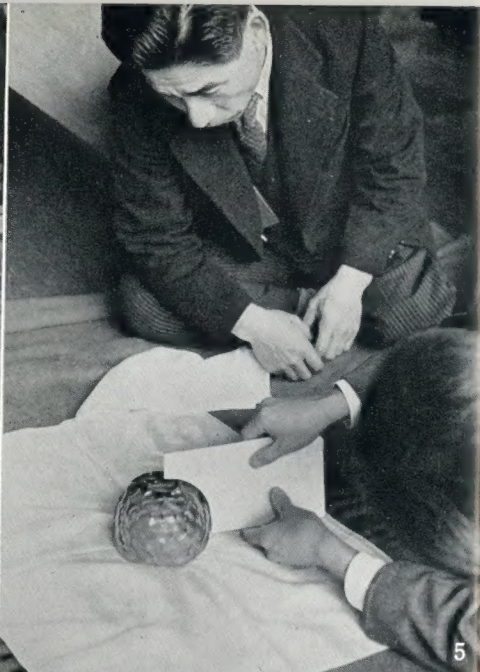
正門の前の銀杏が黄ばみはじめると正倉院の辺は賑かになる。乾燥期に入る奈良の秋も十月の半ば頃になると天候が定まって快晴の日が多い。開封（勅封を解く）、「御蔵開き」は毎年十月十五日前後に行われる。近世では



② 右から４人目は侍従，１人おいて鍵箱，次は鋏箱.
③ 仮設した桟橋の階段の下で手を浄め口をすすぐ.

勅使（太政官の辨官）が参向し東大寺の長吏（多く京都山科の勧修寺に居た）と三綱の他に、檢使役の奈良奉行が立会って與力・同心以下の嚴重な警固の下で行われた。今は勅を奉ずる侍從が正倉院の管理を担当する宮内廳書陵部長ら一二と立会うだけであるが、儀式は嚴粛そのものである。勅封（幅約三寸、長さ一尺余の横紙の中央に御署名がある）が解かれて、扉が開けられた一瞬、ほのかな香のかおりを漂わせて流れてくる冷い空氣が一年間の無事を告知する。

手水を終えて北倉扉前の定位置につけば，まず勅封の鞘箱がはずされる⑧．ついで勅封の部分を縄から切り離し①②，勅封の上についている侍従封を検査③．それから勅封の包を順次にとく．勅封をとりだし，侍従と書陵部長とが，異状の有無を確める④．勅封を取った後，鑁の縄を解き鑁をはずす⑤．次いでクルロ（カンヌキ）をあけ⑥，扉を左右に押し開く⑦．侍従と書陵部長とが懐中電燈を手に庫の内を一巡，1年間異状のなかったことを確認する．北倉の開封がすめば，中倉⑨，南倉⑩と，同じ手順でひらかれる．南倉の開封が終るとはじめと同じ行列をととのえて帰る．後刻，聖武天皇と光明皇后の御陵へ一同がそろって参拝する

①は北倉内部．保存状態．陳列棚には，光線，湿氣，ほこり除けのために，厚地の薄茶色の懸帳（カーテン）がかけてある．ガラス戸棚の中の宝物にも一つ一つ白絹の覆がかけてある．開封されると懸帳をはずし，白絹の覆をとって風通しを行う．覆取りをする人は，その下の品物が何であるか，どこが損じやすいか，どこにきずがあるかをよく知っていなければならない．②は北倉階上の鏡，③は同階下の薬物類．④は同階下の前棚で，上段には金銀平文琴，中段には五絃琵琶(23頁参照)がある．

## 曝涼

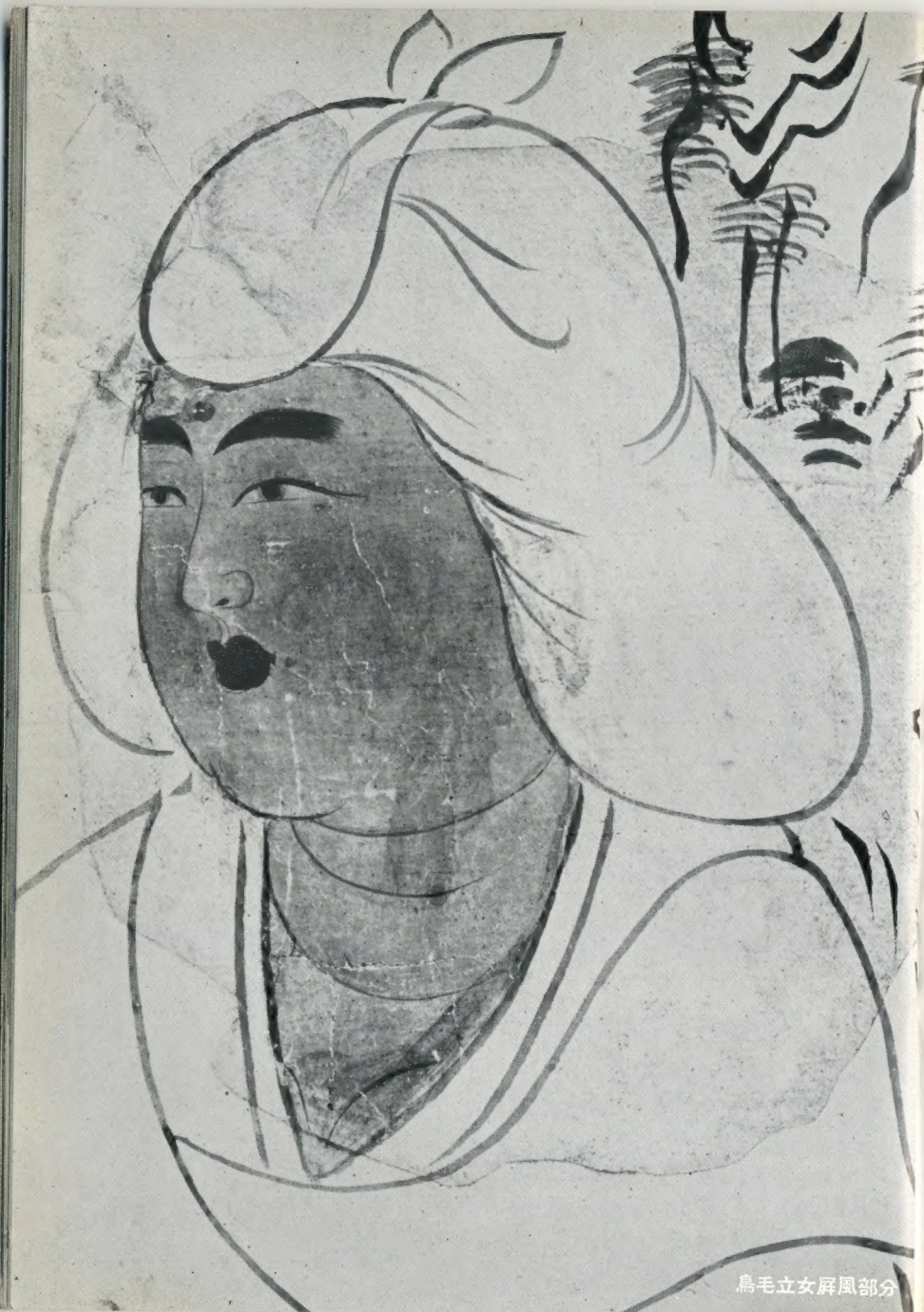
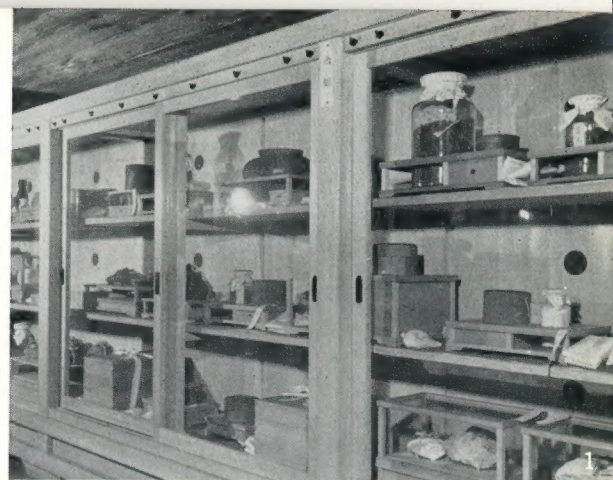
公物を定期的に曝涼することは、文書典籍の保管に任ずる図書寮その他の役所でも早くから行われたが、正倉院の曝涼は桓武天皇の延暦六年（七八七）がはじめである。

その頃の曝涼がどうであったか、判然としないが、点検することがすなわち曝涼であって、品目や数量を調べることに重点があったらしく見える。

今は保存のための曝涼である。染織品、竹工品、紙類などカビの生え易いものには風通しが必要である。瑇瑁、犀角、桐、獣毛の製品は害虫から守らなければならない。明治時代に磨ぎ上げた太刀・鉾の類は錆を防がなければならない。通風、防虫剤の入替え、油引きが行われるかたわら、命数による損傷品の修理計画を立てたり保存と陳列のために施設の改善が工夫される。

宝物は陳列棚に陳列してあるもののほかに，唐櫃(からびつ)や重ね箱に収めたまま積んであるものも多い．それらは一つ一つ蓋をとって，風を通し，虫や黴の有無を調べる．①は北倉階下，薬類の風通し．手前に臈蜜（蜜蜂の巣を煮て臈を採ったもので，薬用にも工藝用にも使われる）がみえている．③は中倉階下．雑帯（裝身具の組帯）や，色紙などの風通し．④は同階上で矢の風通し．矢は数千本あり，鉄，角，竹などの鏃，玉虫の翅(はね)で飾ったものもある．だいたい 50 本ずつ胡祿(ころく)(矢を入れて，背負うもの）に入っている．②は庫(くら)の中の空氣の清浄度を調べるために置かれる銀，眞鍮，アルミニウムの板．庫内の空氣は生駒山の頂と同じくらいに汚れが少いことがわかった．

献物帳に載っている袈裟はたためないので，北倉階上に籐の網の上に拡げたまま保存されている①．②③は１枚ずつ数人がかりで持ちあげ，棧で支えながら風を通し，防虫剤をとりかえる．風通しの際，ガラス拭きも行われる④．手前の箱は樟脳包み．⑤は南倉階上の伎樂面の風通し，奈良朝の唐櫃に収められている．⑥は中倉階下の裝身具．象牙の櫛がみえる．湿度の高い日や雨天には沈香，丁子などで防虫剤作りに費される⑦．⑧は中倉階上の鞍．蓋をあけて防虫剤の入れ換えをする．⑨は同階下の前棚，墨と仮斑竹(39頁参照)の箱．⑩はその下の段で，筆と墨．左端は竹に沈香をはった未完成の筆の軸．いずれも防虫剤の入れ換え作業．

① 刀劒手入れ（中倉階上）. 無水アルコールでぬぐい，打粉をふり，油をひく. 曝涼の合間に保存のための補强作業や記錄がとられる. ②は麻布菩薩(53頁参照)を軸裝にしたてるところ. ③は昔の修理記錄写し，⑤は白瑠璃碗（カットグラス）の台の寸法とり（中倉階下）. ⑥は獅子面の組み立て. 面は顎だけでなく舌も動く(南倉階上). ⑦は唐櫃の修理（中倉階上）. 櫃には古文書が収められていた. ⑧は古文書を入れる容器を工夫しているところ. 往來（見出しの札）のついている古文書がみえる. ④ 扉の鍵には毎日繩をかけ，責任者の封をつける. 昔は東大寺の三綱の役目であった.

鳥毛立女屏風部分



五色龍歯

②は北倉を入って正面にある棚(裏側). 上段の左端は彫石横笛. 次は五絃琵琶, 右端は阮咸. 下段は杖刀(仕込み杖). 間に置いてある白い包は防虫剤. ①は階下西棚の薬品類と容器. ガラスビンは陳列のための新しい容物. 五色龍歯は, 象の臼歯の化石. 左側の大きい方は1本の歯のおよそ3分の2. 瀬戸内産に似ている. 鳥毛立女屏風部分 (階下北棚). 顔や手をのぞいて彩色の代りに鳥毛を貼ったものだが, 鳥毛はほとんど残っていない. 額と口元に緑の描き化粧をほどこし, 唇は甚だ赤い.

## 北倉

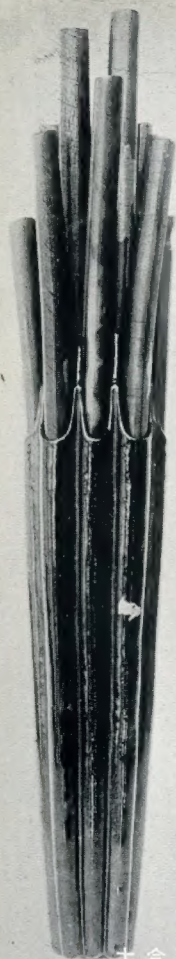
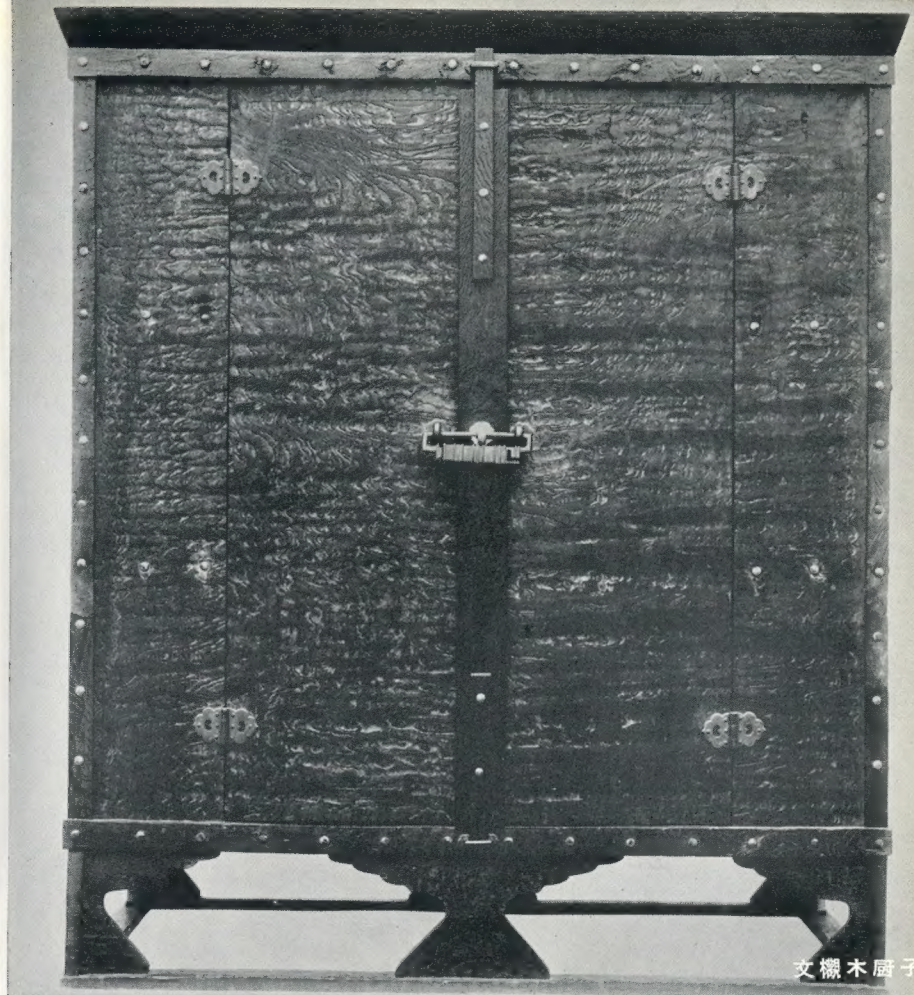
国家珍宝帳をはじめ、五種の献物帳(正倉院(一)48・49頁参照)に載っている「帳内御物」が初めこの倉にどのように分納されていたかは分らない。羂索院双倉のものが南倉に移り、のち更に宝庫が修理されるようになってからは納物は三倉の間を轉々とした。いま北倉にあるものは「帳内御物」と、これに準ずるものであって、由緒が最も正しいものとして、正倉院宝物の中にあって特に尊重せられていて「北倉御物」「北倉もの」の称がある。宝物は献物帳が列んでいる北倉の階上北棚から見はじめて、南倉の階下に見終るようにガラス戸棚や覗きケースに列べられ、そのまま格納される。その品々は千二百年以前のものとは思えぬほどに見えるけれどもさすがに歳月の長さからくる脆さには争われないものがある。

十合刀子

十合刀子

白葛箱

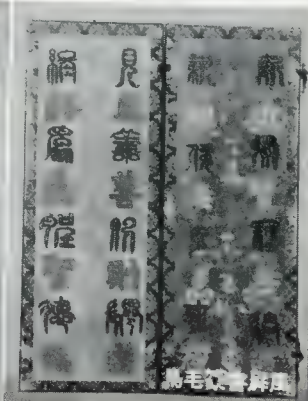
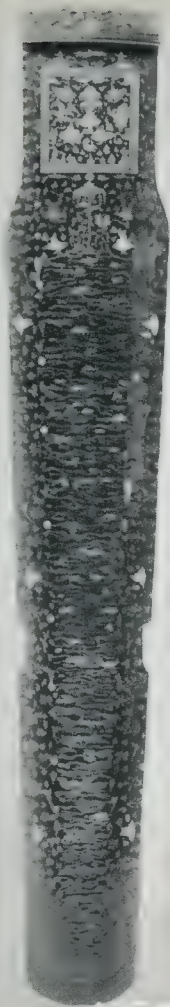
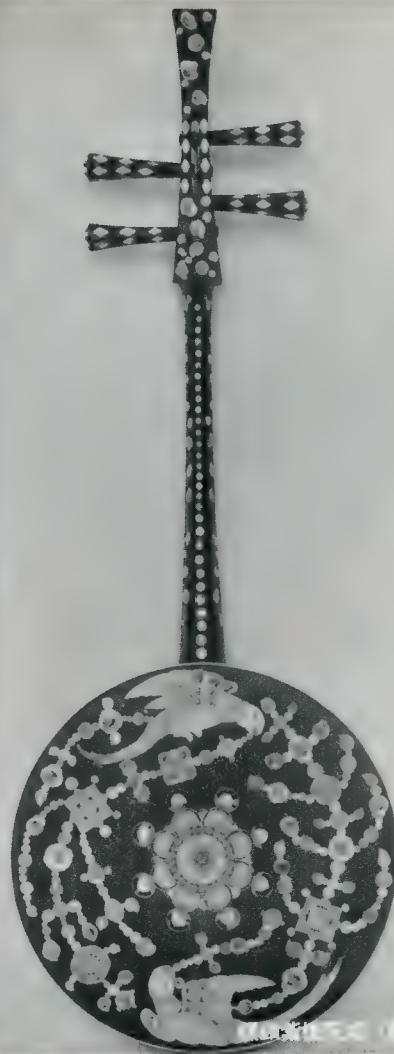
文欟木厨子

雜　集

文欟木（けやき）厨子（階上西棚）．天武天皇より孝謙天皇まで相傳のもので，この両頁の御物が収められていた厨子．雑集は聖武天皇が隋，唐の詩文を抄錄されたもの．天平三年の日附があり，白葛箱（北棚）に入っていた．十合刀子（北棚）には（左から）刀子・鑽・錯・鉋（ヤリガンナ）が入っている．

紫地鳳形錦御軾(階上西棚）は肘つきてある. 文様の鳳形は, 中國風だが葡萄唐草と全体の図案は西域風. 人勝残闕(階上西棚）は色裂て人物, 草花などをつくり, 正月に贈りあったもの. 写眞は天平宝字元年(757年）に奉納のものの残闕を2枚まとめたもので, おもてに‘壽保千春’などの佳祥の文字がある 漆胡瓶(階上西棚)はペルシア風の瓶である. 竹を編んで籠をつくり, 内と外から漆をかけて, 山, 木, 鹿, 鳥, 蝶, 人物などの形に切った銀をはりつけて研ぎだしてある 蓋の頭に銀の鎖がついていて把手にとりつけてある 國家珍宝帳に‘銀平脫, 花鳥形, 銀細鏁, 連繫鳥頭蓋, 受三升半’と説明されてある. 1升4合位は入るものと推定される.

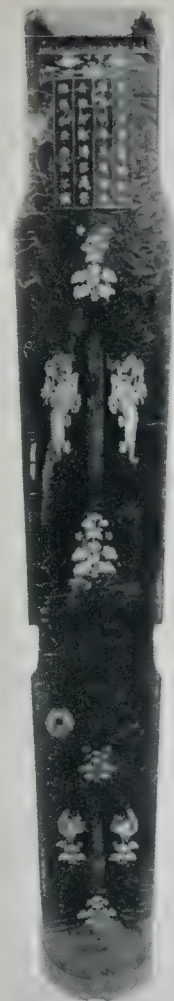
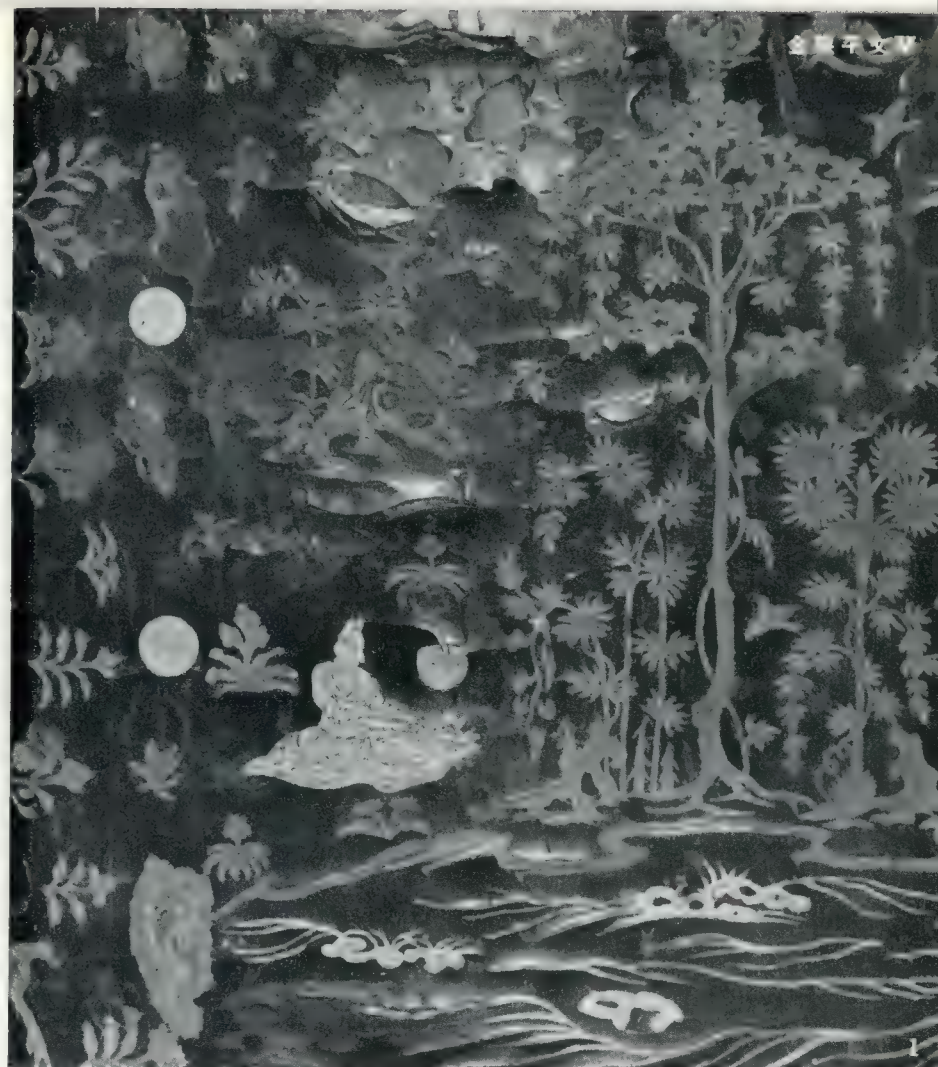


紫地鳳形錦御軾部分

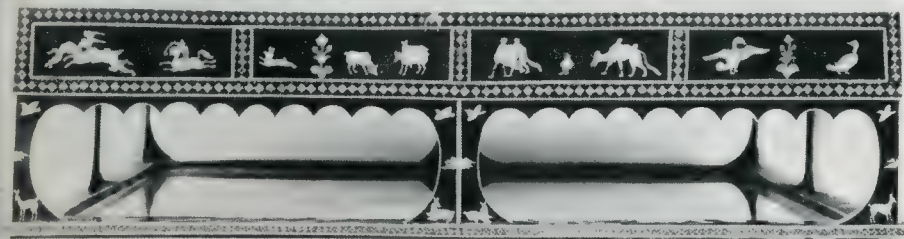
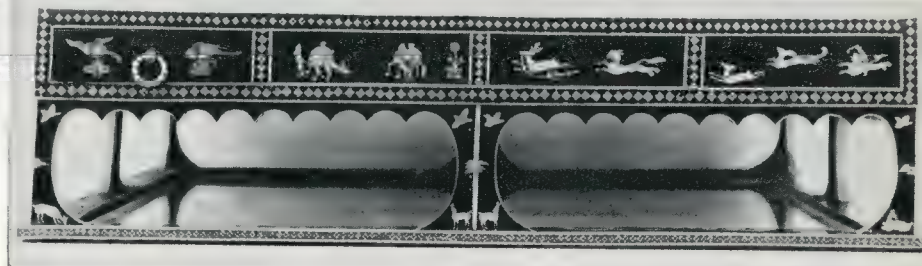
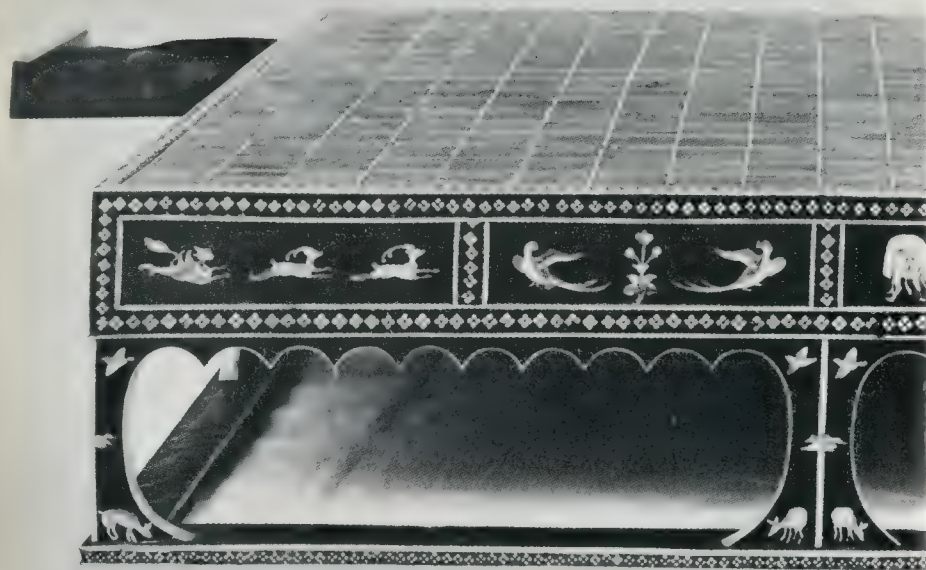
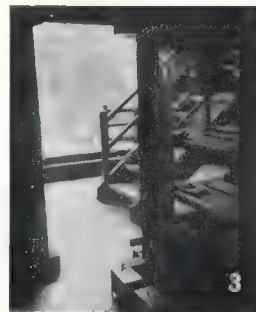
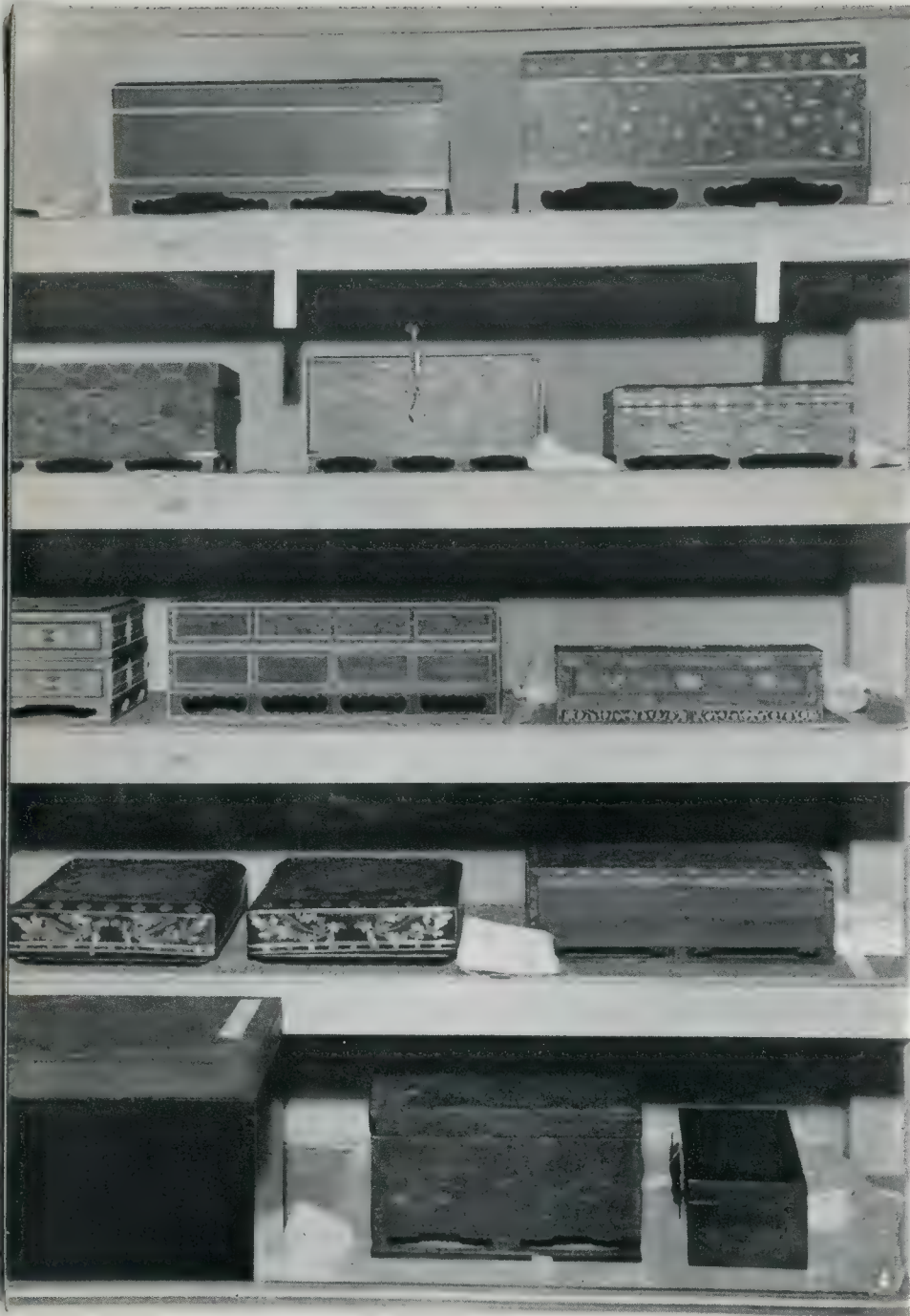
紫地鳳形錦御

平螺鈿背八角鏡(階上南棚)の表は白銅，背(裏)は螺鈿．花形の黒い部分は琥珀．地にはいろいろの色石の細片を撒く．鳥毛帖成文書屏風(階下北棚)は鳥毛を貼って文字をつくった六枚折りの屏風(その部分)．鳥毛篆書屏風(階下北棚)は，篆書には鳥毛を貼り，楷書は白く抜き，または絵具を摺りつける．地文は吹絵．臈蜜(階下)は江戸時代シャボンといわれたこともある(8頁参照)．

螺鈿紫檀五絃琵琶(階下前棚)．五絃の琵琶は中國の文献にもみえるが，その構造が直接わかるのは，この琵琶である．この特長は，五絃であること，頸が眞直なこと，である．直頸琵琶はインド起原で西域をとおして中國に入ったものといわれている．表の捍撥には，駱駝に乗った胡人が螺鈿であらわされている（正倉院(一) 57 頁参照)．槽（胴部）の覆輪は金箔をおいて，瑇瑁がかぶせてある．側面と裏とには，花，鳥，蝶，雲などの螺鈿，花の中心は，彩色の上に瑇瑁をはる．



螺鈿紫檀阮咸(階下前棚)て，阮咸は竹林の七賢人の一人，中國の晉の阮咸の名にちなんでつけたといわれる．これは國家珍宝帳に，緑地絵捍撥とあるもので，捍撥(撥のあたるところ)には，緑地の皮に4人の女性が遊楽し，1人は阮咸を弾じている絵がある．沢栗の腹板以外は，全部紫檀．腹板には瑇瑁のふちとりがある．轉手(糸をしめるところ)，海老尾(頭部)と側面，また裏側は，一面に螺鈿，瑇瑁，琥珀の飾りがある．裏には花形を挟んで綬をくわえた2羽の鸚鵡が相対している．

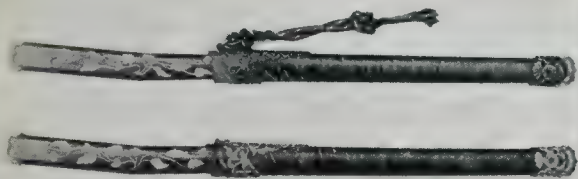
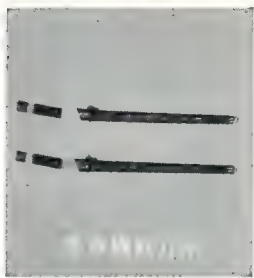
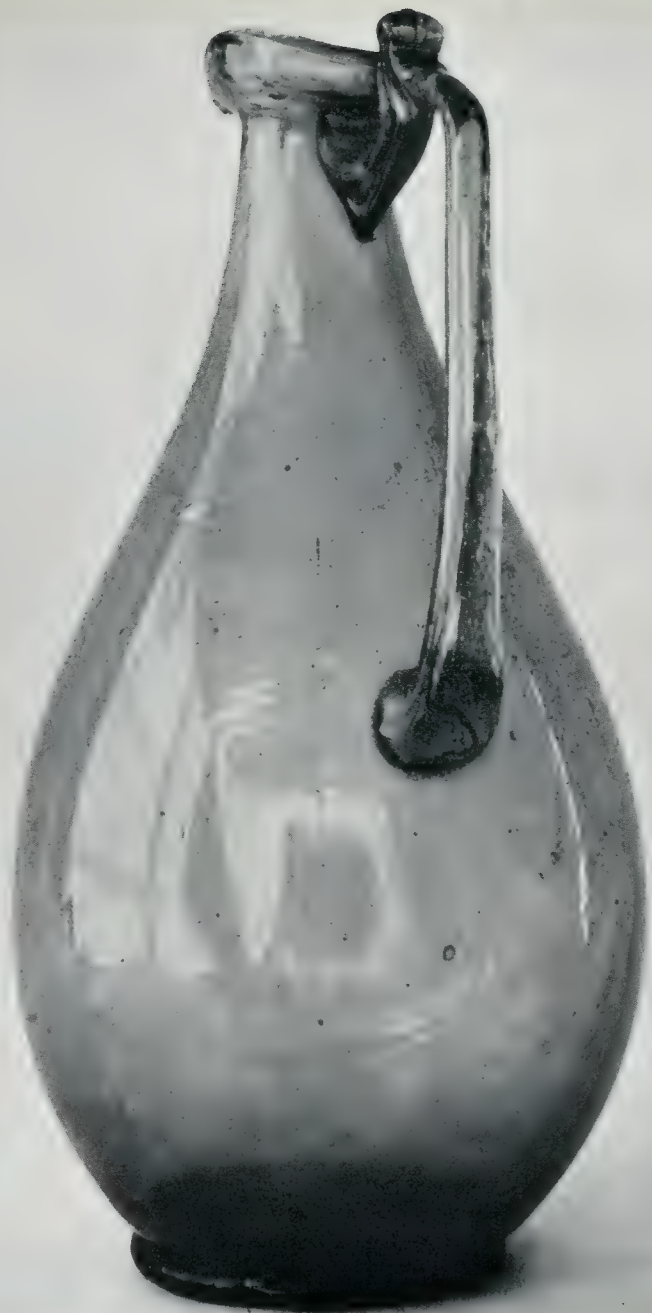
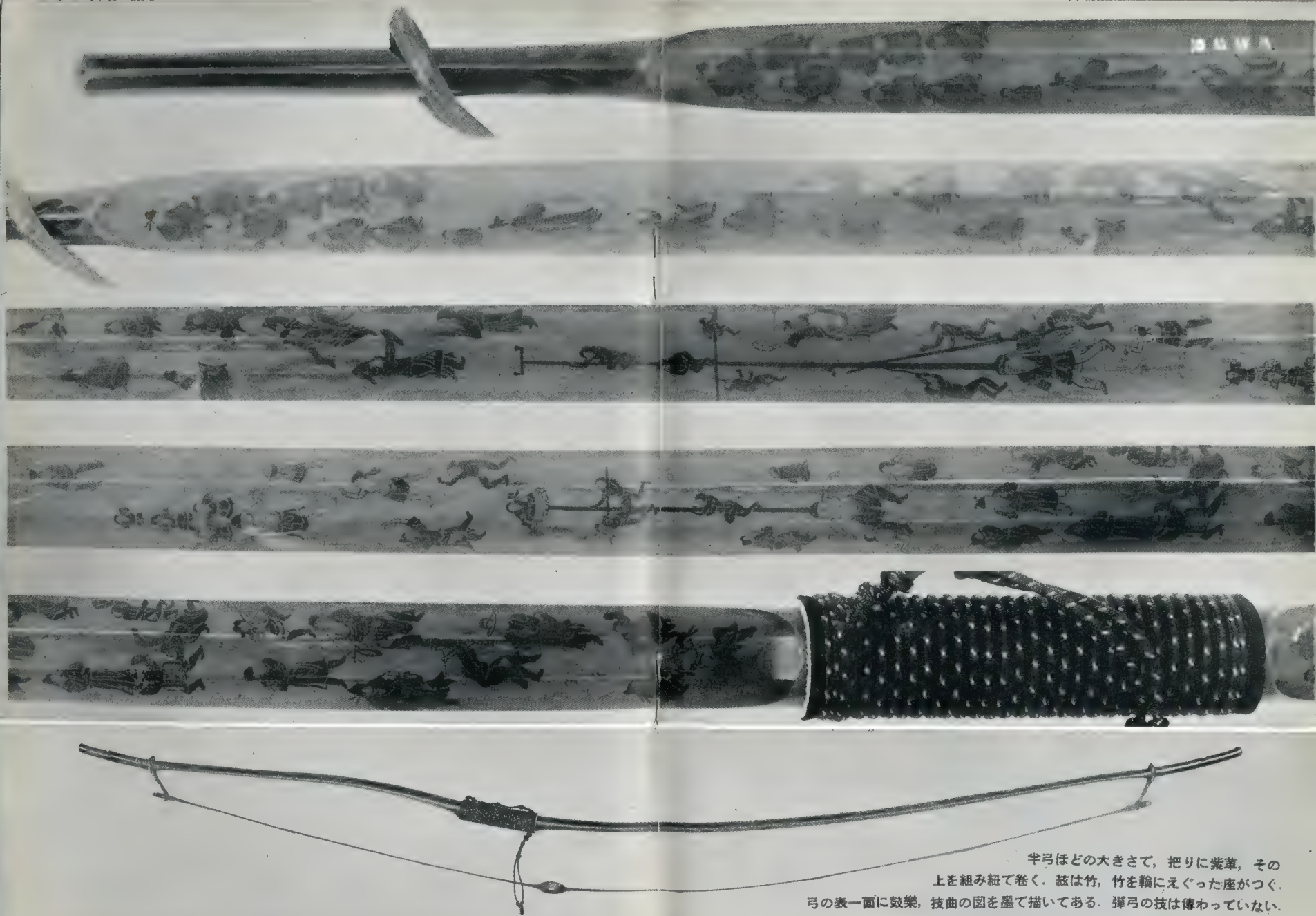
金銀平文琴

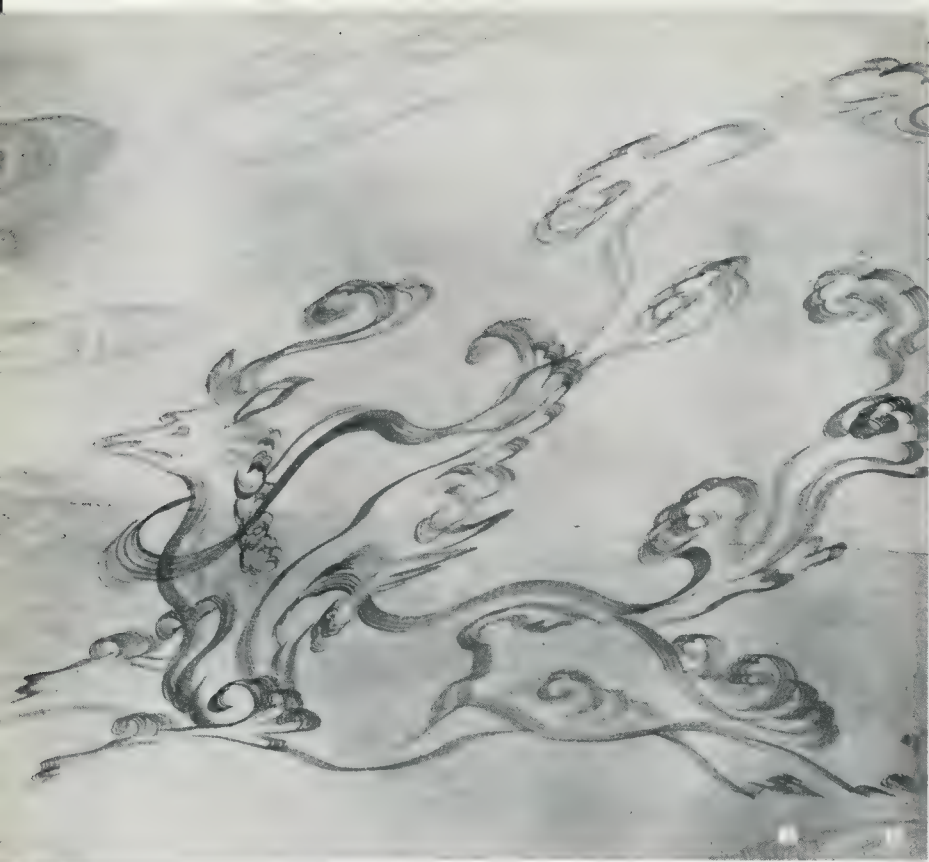
1

金銀平文琴の部分．七絃のものを琴（きん）という．天平勝宝八歳（756）六月二十一日に，奉献された琴は，銀平文琴であったが，嵯峨天皇の弘仁五年（814）十月に，正倉院からとり出され，そのかわりとして，八年五月二十七日に納められたのが，この琴である．平文というのは，金や銀の薄板を切って，文様をつくったものを，漆で固めて研ぎだした平脱と，だいたい似た手法とみられる．この琴は表，横とも全面に金銀で平文がほどこされている．但し背（裏）は銀平文．材は桐，一部は紫檀．徽（絃のおしどころ）は13．前頁


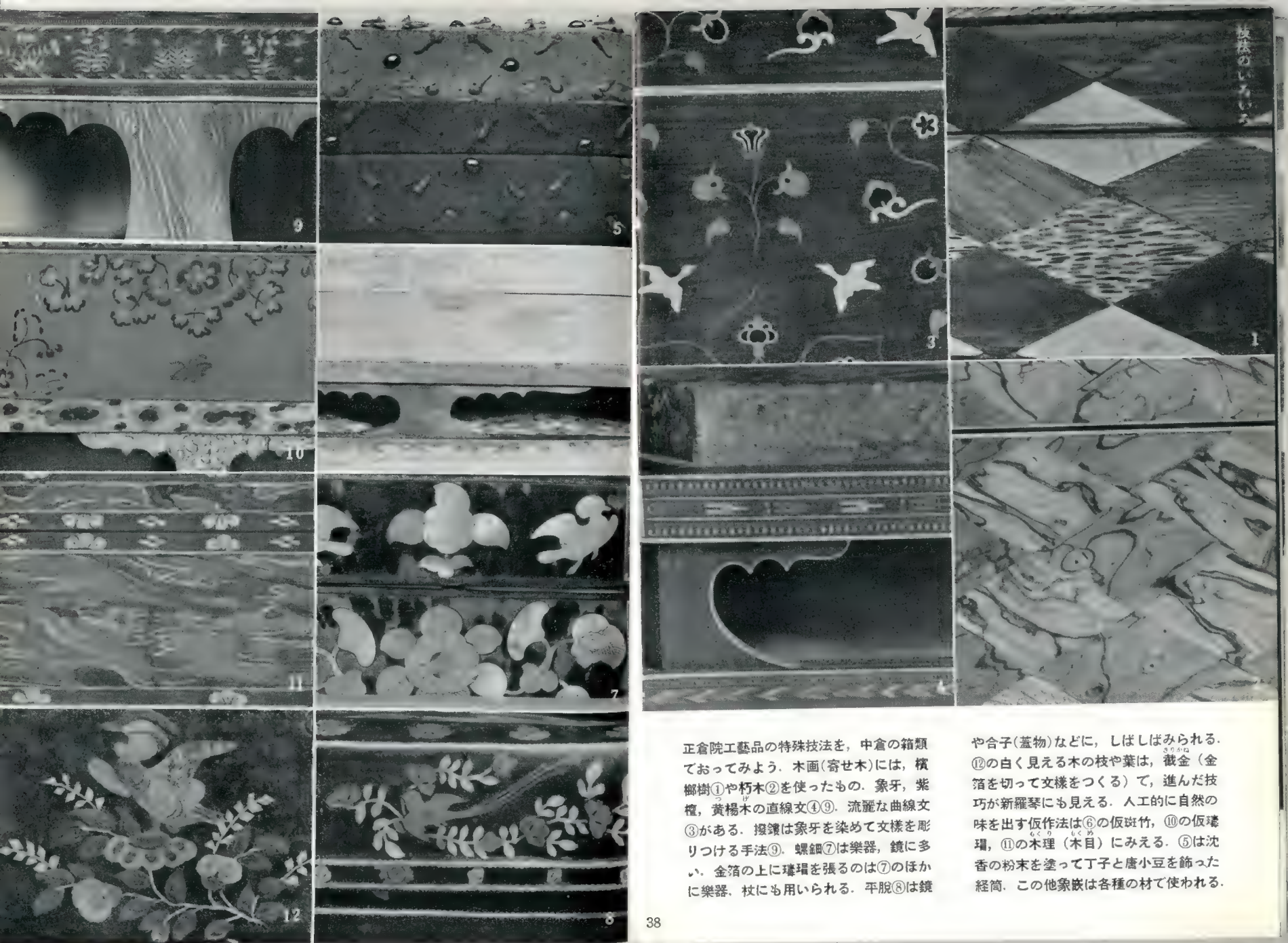
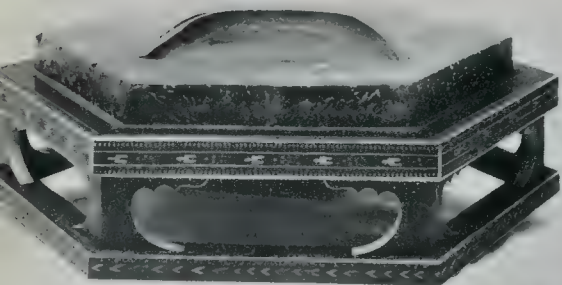
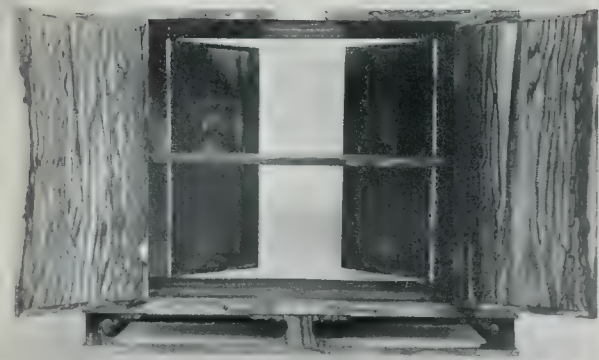



の上部，四角な囲の中には，樹下に3人の高士がおり，静かな野外で宴を楽しんでいる．1人は阮咸を，1人は琴を弾き，1人は飲み物を飲んでいる．方格の下にも樹木を挟んで2人の高士が宴楽している．側面には獅子，鹿が走り，鳳凰や鳥が飛び，蝶が草花の間を舞っている．背の上部には，漢の李尤の作った銘がある．文様のにじんでみえるところは，銀が硫化して漆の中へ浸みでたところ，内部の裏板には‘乙亥之年季春造’の墨書があり，この乙亥の年をば，唐の玄宗の開元二十三年（天平七年）にあてる説がある．

木画紫檀碁局(階下北棚). およそ49cm平方の紫檀ばりの碁盤で, 盤面の界線は象牙, 目は現代と同じ19, 眼は花形の木画. 盤面の周辺, 側面, 畳摺りは, 四ッ目を菱につないだ木画. 畳摺りの表は瑇瑁をはり, 繧繝彩色（同色配合）の下絵が透けてみえる. 前後に抽出しが一つずつ附いていて, 一方を開けば, 反対側の抽出しも開く仕掛になっている. 抽出しの中には, 一つは亀形, 他方には泥亀が彫ってある. あげ石でも入れるのであろう. 硬玉の白石と橄欖石の黒石, 紺牙と紅牙の撥鏤の碁子が別に保存されている.

①は中倉階上（東南から見る）．右上のケースには弓が見えている．周囲のケースは，さまざまな大刀．手前ケースは鉾先．天井に登る梯子は，足がかりが浅い．右上に，北倉の出桁がのぞいている．②は階下西棚．箱や献物用の机が並んでいる．③は階下の入口附近．温，湿度計がおいてある．④も階下西棚の箱類．上段右は紫檀木画箱（38頁参照）．2段目右は，金銀絵木理箱（38 頁参照）．中央は朽木箱（38頁参照）．

## 中倉

中倉階上は武器の倉といってもよい。大量の甲・太刀・弓・箭が献物帳に載っているが、恵美押勝の乱に出蔵せられて、現存の武器はこれとは別物で、由緒も知れない。厖大な正倉院文書もこの階の一隅にある。階下には大佛開眼の日の奉納品、東大寺行幸などに伴う献納品がある。ここに多い箱と机も、多く献物に関わりがあるものであろう。また用途からいえば調度品・文房具・遊戯具・装身具、技法から見れば木工品が比較的多くここに集まっている。かの有名な香木蘭奢待もここにあるが、この階で瞠目驚嘆するものは何といってもガラス器と箱・机であろう。ローマ風のカット・グラス、ペルシア風のガラス瓶、多種な寄せ木と木象嵌や多彩な彩絵の箱と机。これあるがために中倉は三倉の中でもっとも華やかに印象づけられもする。

白瑠璃瓶（階下北棚）．形は北倉の漆胡瓶（19頁参照）と同じ胡瓶形．白色のガラス製．把手がすっきりとして，優れて美しい．白瑠璃高杯（階下北棚）．淡い萌黄色のガラス製．皿形の部分に台をとりつけたものであるが，すこし傾いている．氣泡も大きい．白石火舎（階下北棚）．白い大理石で，火鉢形．銅に鍍金した獅子が前脚で支えている．鐶は金銅，中に固った灰が残っている．刀子（小刀のこと，階下北棚）．鞘は斑らな犀角．金具は鍍金した銀，把手は紫檀に螺鈿をほどこしたもの．玉虫翅飾りの刀子（階下北棚）．木心に樺を編んで巻きつけてある．鞘の4箇所に玉虫の翅を飾る．把手は，象牙に樺を巻く．

半弓ほどの大きさで，把りに紫革，その
上を組み紐で巻く．絃は竹，竹を輪にえぐった座がつく．
弓の表一面に鼓楽，技曲の図を墨で描いてある．弾弓の技は伝わっていない．

沈香金絵木画水精荘箱（階下西棚） 沈香と紫檀張り，矢羽形などの部分は木画 水晶を長方形に切ってはめこみその下に彩色絵がある 台の所は象牙の葡萄唐草に獅子を配する. 沈香木画箱（階下西棚） 台の足は紺牙の撥鏤である 密陀絵彩絵箱（階下西棚）.

金銀鼓樂絵箱（蓋表）

金銀鼓樂絵箱の蓋（階下西棚）．蘇芳地に金泥で，舞踊する童子，樂器を奏する童子の図が描かれている．金銀山水絵箱(階下西棚)．黒柿を蘇芳で染めた上に，金銀で山水を蓋と側面に描く．絵紙(階下)．走獣を刷毛で描いたもの．絵画としてもすぐれている．

正倉院工藝品の特殊技法を，中倉の箱類でおってみよう．木画(寄せ木)には，檳榔樹①や朽木②を使ったもの．象牙，紫檀，黄楊木の直線文④⑨．流麗な曲線文③がある．撥鏤は象牙を染めて文様を彫りつける手法⑨．螺鈿⑦は樂器，鏡に多い．金箔の上に瑇瑁を張るのは⑦のほかに樂器，杖にも用いられる．平脱⑧は鏡や合子(蓋物)などに，しばしばみられる．⑫の白く見える木の枝や葉は，截金（金箔を切って文様をつくる）て，進んだ技巧が新羅琴にも見える．人工的に自然の味を出す仮作法は⑥の仮斑竹，⑩の仮瑇瑁，⑪の木理（木目）にみえる．⑤は沈香の粉末を塗って丁子と唐小豆を飾った経筒．この他象嵌は各種の材で使われる．

雑帯(階下棚外)は色糸を用いた装飾用の組帯．水精玉も装飾用．紅牙撥鏤尺は1丈様か1寸．斑犀尺の目盛りは金．青斑石鼈合子(以上は階下中棚)のスッポンの目は琥珀．黒柿厨子(階下西棚)，両面開き．青斑石硯(階下中棚)．六角青斑石に陶製の硯を嵌めこんである．その形から風字硯ともいわれる．台は象牙，紫檀の木画．四重漆箱(階下西棚)．小さな簞笥形で，抽出しが4段．上の段の抽出しを引きぬき，順に内側の止金をはずさなければ決してあかない秘密箱．

紅牙撥鏤尺(表

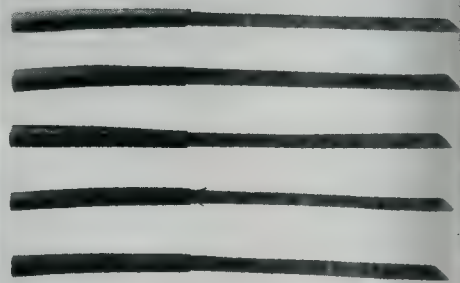
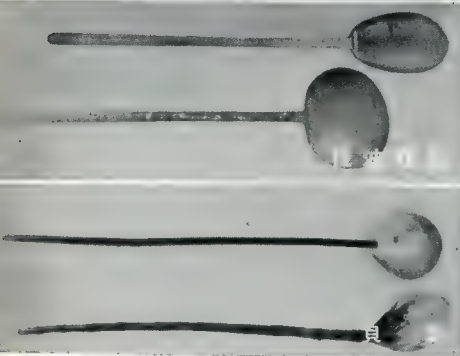
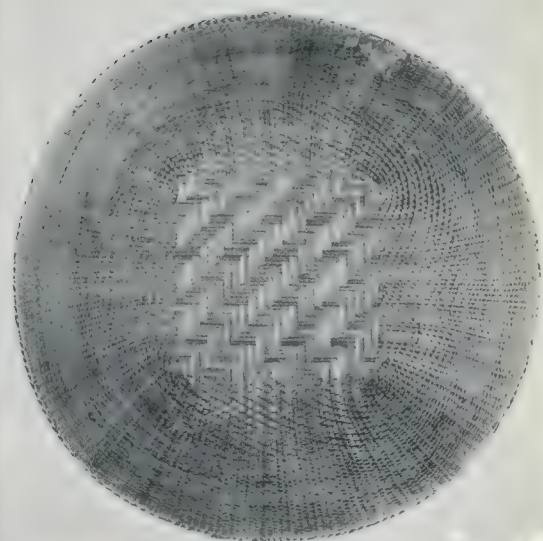
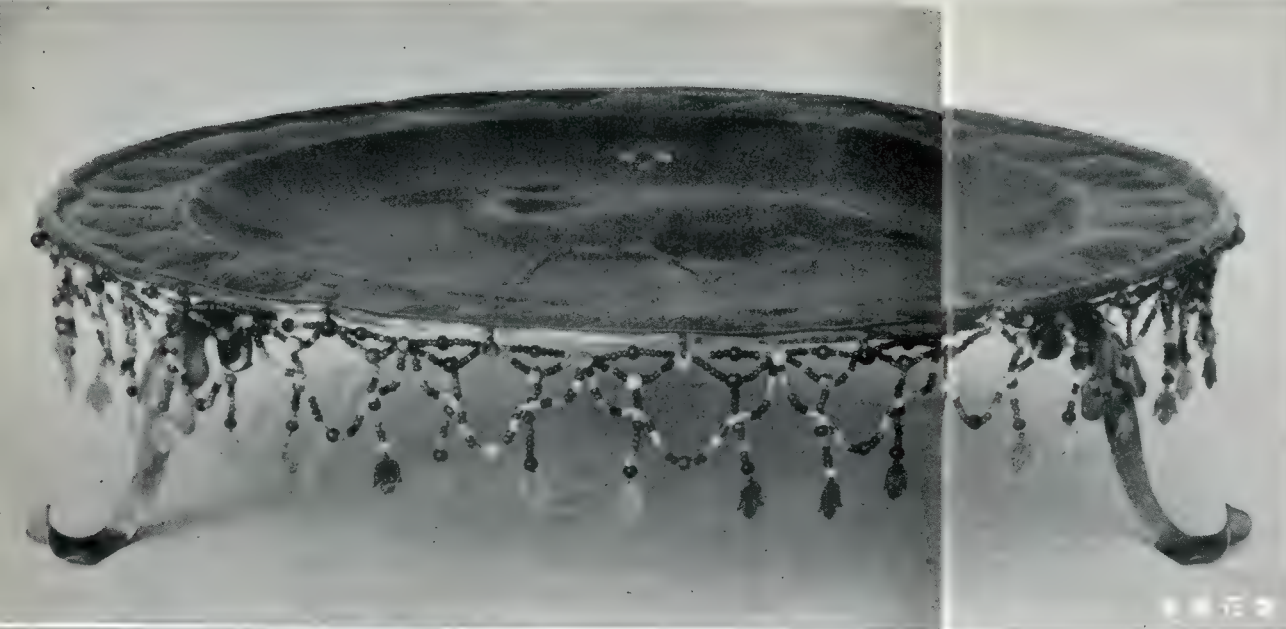
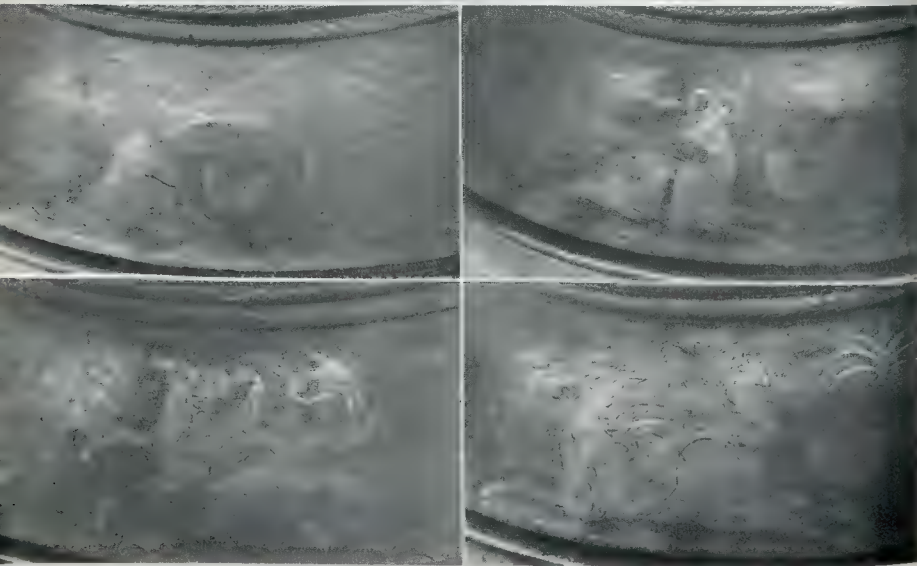
水精玉

## 南倉

中倉が武器・調度品・装身具中心であるといい得れば、ここは行事関係中心といえる。大佛開眼会の用具、東大寺で行われた聖武天皇母后宮子と聖武天皇の御一周忌の用品、正月子の日その他の年中行事に用いたもの等がある。それはおのずと南倉には柄香炉や如意のような佛具、開眼会を飾った種々の樂に用いられた樂器や面、裝束の類が多いこととなるのである。また材料の面からいえば、南倉の特色は金工品と陶製品と染織品が多いことにある。正倉院裂と呼ばれる正倉院の染織品は、いまなお日々に「發掘」整理せられているのだが、その中には献物帳に記されている屛風として北倉に、献物に用いた机の敷物―几褥として中倉に納めてよいものもあるが、最も多くは樂裝束や幡（ばん）などの佛具として、もとはこの倉にあったものであろう。

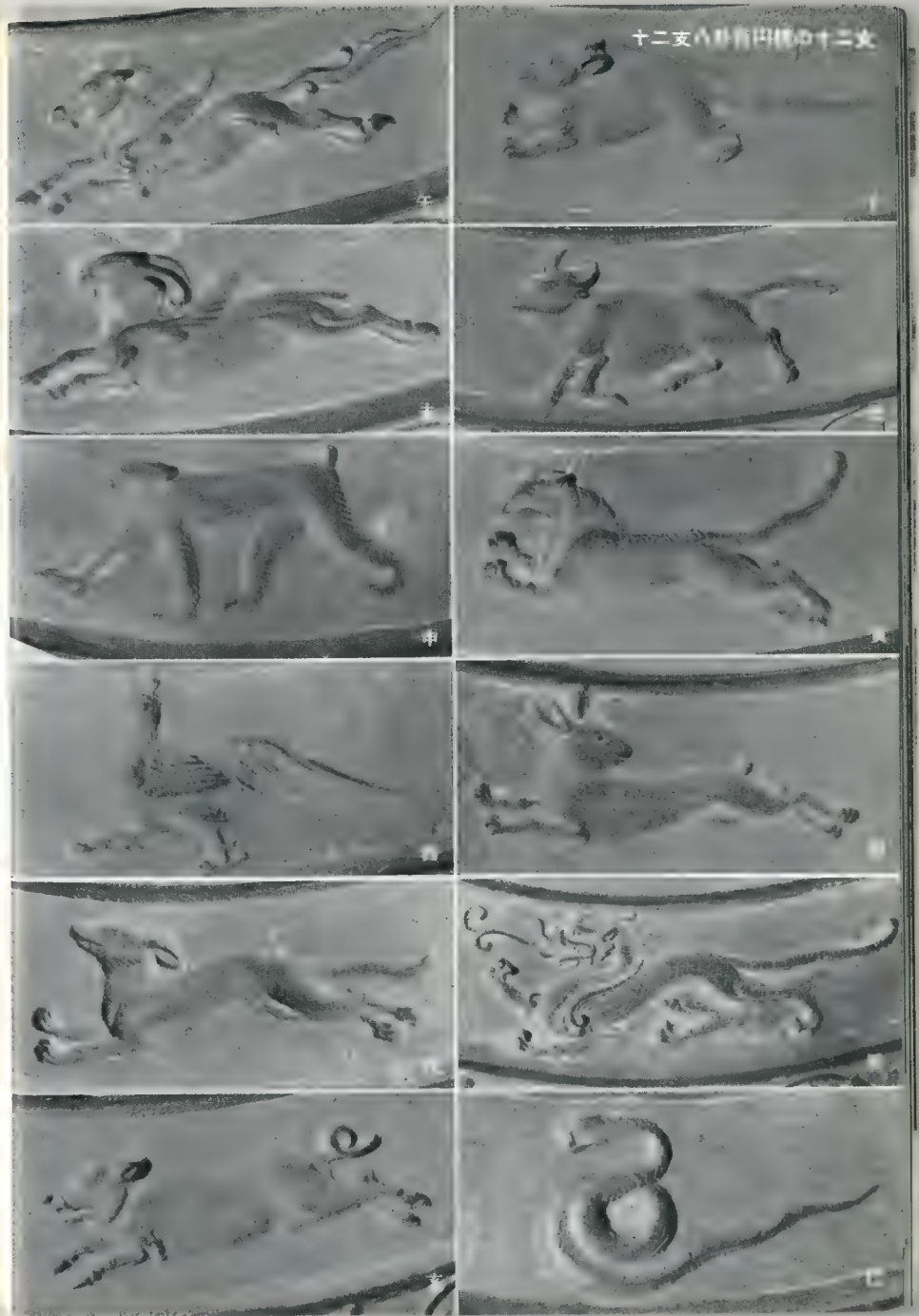
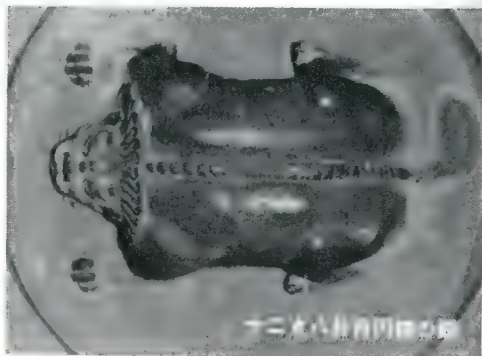
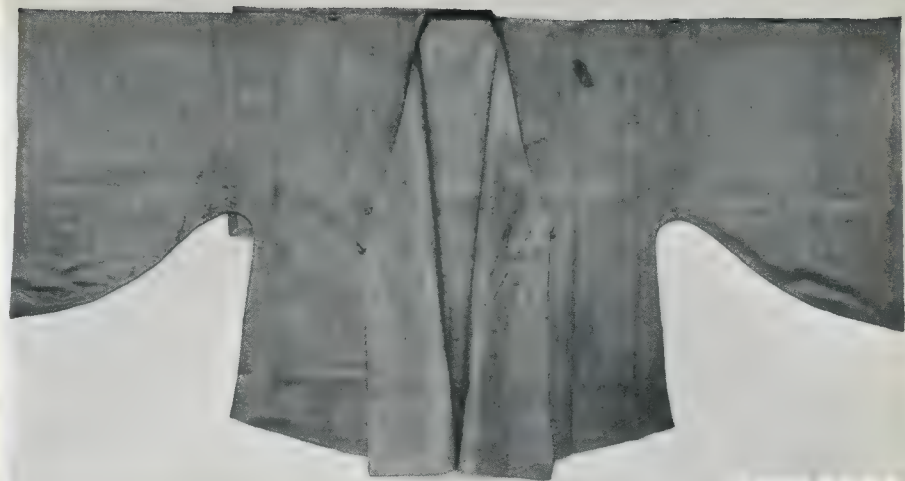


金銀花盤部分

①は南倉階上北棚．鉄鉢形の三彩などが，ずらりと並んでいる．その左に同種の皿類がある．④は階上の花籠（けご）の類（44 頁参照）．⑥は階上前棚．上から 2 段目，右端は金銀花盤（43，45 頁参照）．中央は銀平脱鏡箱．その下段に鏡箱と高杯とがある．②は階下北棚の玉箒（正倉院(一)59頁参照）と辛鋤（からすき）．正月子日（ねのひ）の行事に使われたもので，鋤には天平宝字二年（758）の銘がある．③は同中棚で，上段右に舞樂の大刀，その下は阮咸．⑤は同南棚．左端の上は腰鼓の胴，下は，三彩の腰鼓（正倉院(一)47頁参照）．⑦は階下南棚．聖武天皇の御一周忌に使用した幡の鎮鐸や金銅幡（52頁参照）がある．金銀花盤の説明は次頁へ。

花籠は，浅形，深形合せて560余．聖武天皇御一周忌などに使用した散華用ので，日づけを墨書したのが残っている．磁皿は，白土に白と緑の釉がかかっている．金銀花盤は銀に鍍金した花形の盤．中央に花鹿を打ち出し，ガラス，その他の玉を繋いだ飾りを垂らす．裏面に刻まれた文字により，中國から入ったものとみられる．庖丁（階上北棚）は，小型の刺身庖丁ほどの大きさで鉄製．柄は粗末であるが，漆がかかっている．貝匙（階上北棚）は長さが30 cm内外．アコヤ貝を卵形に切って磨いてある．10本ずつ麻紐で束ねてあるが，9本は篠竹の柄．1本は繁節竹の柄である．佐波理（正倉院（一）56頁参照）匙（階上北棚）は，丸形と長形との2種類あって，二つで1組になる．1組ずつ紙で巻いて，10組を1束にしたままのものが残っている．その形は朝鮮でいま日常使われている匙によく似ている．

銀壺(階上北棚)の形は鉄鉢形．台がついている．一対あって，重さは9貫余．全面に馬に乗って狩猟する人物と，野牛，猪，羊，兎，鳥，山岳，草木を毛彫し，地には魚子を打っている．台にも同じ手法の毛彫がある．人物など図様の部分には，鍍金してあるという說がある．天平神護三年（767）二月，称徳天皇が東大寺へ行幸の際の献納品である．

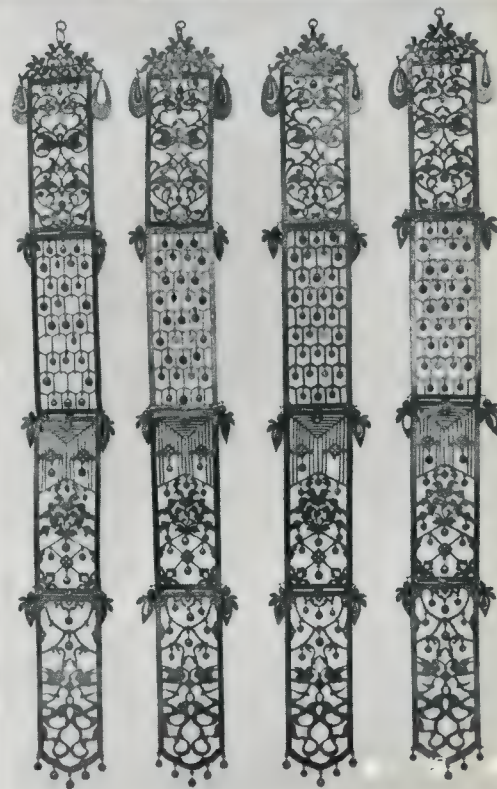
瑇瑁八角形の杖(手前)と，瑇瑁竹形の杖(階上西棚)．八角の杖は，金箔の上に瑇瑁をはり，いしづきは水晶．竹形の杖には瑇瑁で蔓が竹に巻きついている．いしづきは紺牙の撥鏤．漆金箔絵盤（階上西棚）は一対あって，木製の盆形の周囲に一枚ごとに文様のちがう極彩色の蓮瓣が開いている．底に香印座と書いてあって香印(梵字形の香)を焚く佛具である．犀角黄金鈿荘如意(同西棚)．正倉院でもっとも美しい如意である．頭部は犀角．その下は紅牙撥鏤，象牙の透し彫．柄は紅牙と紺牙撥鏤とを一つおきに配し，その境界線は黄金である．左は犀角銀絵如意．

十二支八卦背円鏡の十二支

十二支八卦背円鏡(階上南棚). 径は約60cm, 正倉院最大の鏡である. 中央に, 蹲っている獅子形の鈕(つまみ)がある. その外側に, 青龍, 朱雀, 白虎, 玄武の四神を配し, 次に八つの卦を表わし, 次に十二支を写実的に鋳出し, 外周に葡萄唐草をめぐらしている. 四神と十二支は方位が一致している. 金質は白銅で, まだ銀色に光っている部分がある. 鳥獣葡萄背方鏡(同上). 一辺17cm 強. 正倉院の鏡の白眉.

袈裟付木蘭染羅衣(階上)．表は薄茶色の羅，裏は絁，右の背中に方形の袈裟（右袖下に覗く）がついている．衽，袖の形も珍らしい．金銅幡（階下南棚）．長さ 170cm． 全面に毛彫がある．佛像型（階下西棚）．縦は約 16cm．厚さは約3.3 cm． 板金をあてて佛像を打ち出す型といわれる．墨画佛像は，いわゆる麻布菩薩．二幅の麻（約 140 cm）いっぱいに，優麗な筆致で描かれ，天衣を翻しながら雲に乗って飛行する．天平絵画の代表作．

①②は中倉階下での樂器調查．調査しているのは北倉の新羅琴．上は裏側下は表側の調査．②の手まえ，人字形の物は柱．キャリパスなど測定用の器具は金属品をさけて新しく考案したものを使う．④は南倉での金工品調査．これは南倉の銀壺が，鋳物か鍛造品かを調べ，図様の部分の鍍金の有無を研究しているところ．⑤は黄金瑠璃鈿背十二稜鏡の調査．この鏡の表は銀背はいわゆる七宝製．深い緑と黄褐色の諧調が美しく，技法からいっても全くユニークなもの 10数の部分に分けて，琺瑯を流したものを，鏡にはりつけたことがわかった．⑤は十二支八卦背円鏡の調査．③はその鏡箱の金具を調査しているところ．



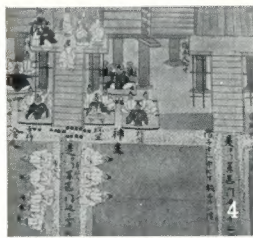
## 調　査

開封曝涼をしおに二つの行事が行われる。その一つは学術の士と技藝の専門家のために宝庫を公開し、國民のために國立博物館まで出藏して宝物を公開することである。他の一つは宝物の科学的調査である。宝物の一般的調査は既に数十年に及んで行われているが、科学的総合調査は漸く近年に至って手が染められたばかりである。正倉院は文化史的には「全アジア」といわれる。この言葉には造型的種類と意匠と技術と資材とを含んでいる。正倉院における調査は多様にならざるを得ない。正倉院の研究は「全科学」であるといえるかも知れない。しかも完全な調査研究は正倉院の價値を本然の高さに引き上げるだけでなくこれこそ究極的な正倉院保全の道であって、この蒋えがたい宝物の保存と利用との一致がここに見出されるのである。

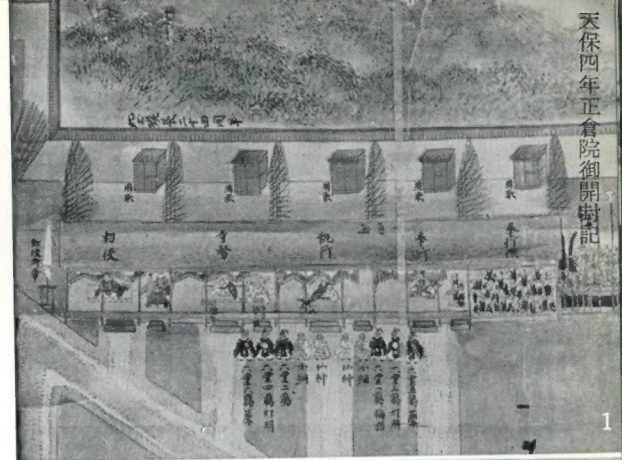
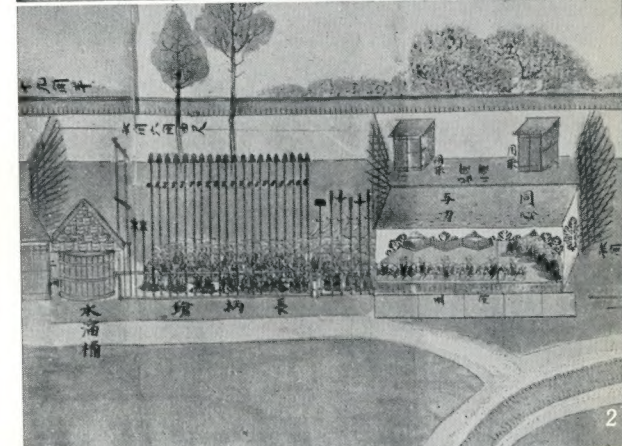
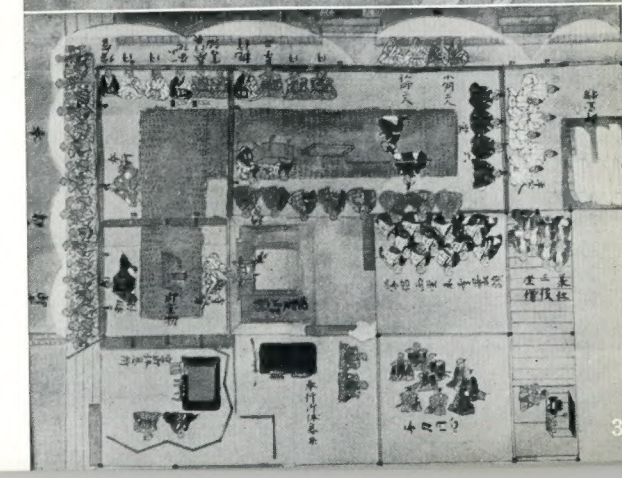
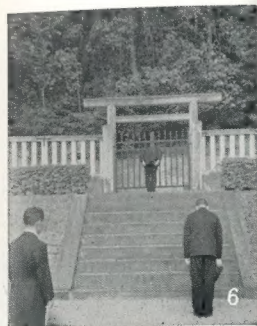
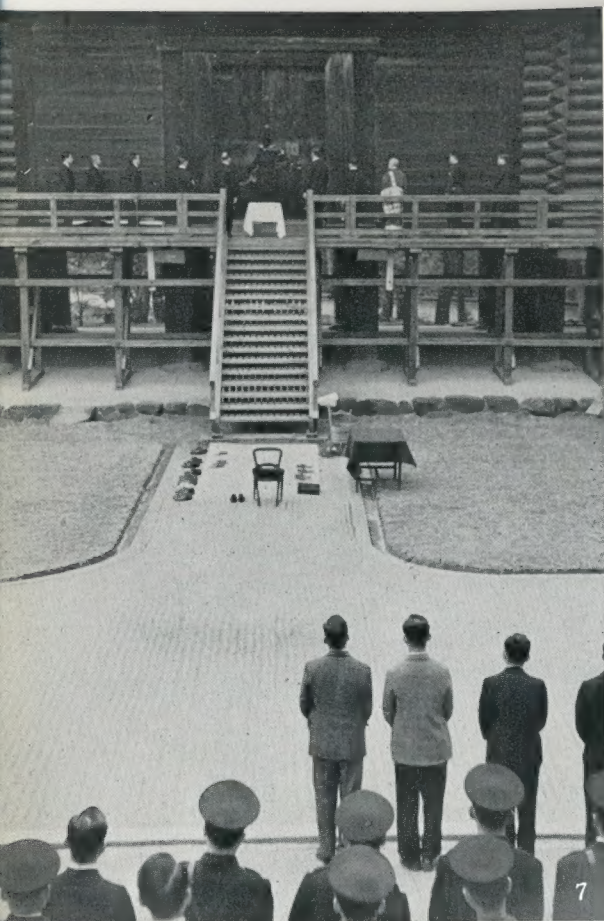
②は持佛堂（正倉院(一)8頁参照）での，聖語蔵の経巻の白点調査．経巻など漢文で書かれたものを読みくだすために，ヲコト点（テニヲハを表す符号）を白墨でつけたものが聖語蔵に多い．点の調査は，國語学國文学における基礎的研究である．③は聖語蔵．①はその内部．この蔵も宝庫の開封の時に開かれるだけである（正倉院(一)10頁参照）．④⑥⑦は密陀絵の調査．密陀絵とは何か，古美術界の疑問の存在である．密陀僧（酸化鉛）を繪具に混ぜて描いたか，絵の上に油に混じてかけたか，などの問題をとくのが調査の目的である．⑤は一方法として，紫外線を照射する．漆は無反應だが油は橙色の螢光を発する．

5

6

①は開封中の宝庫．②は北倉棧橋の一部．幕をはった中で調査が行われる③は哨舎にとりつけた電氣スイッチ．調査や掃除のために，電氣器具を庫の內外に持ちこむので，棧橋の下まで電線がひいてある．これは親スイッチ．この他に二重三重にスイッチがつけられている．④閉封（勅封をつけること）も間近になって扇の鑰の麻繩をとりかえ鑰の舌に油をひく所．⑤閉封も近い好天氣を選んで，庫內の隅々まで電氣掃除器でほこりを吸いとり，陳列棚のガラスも拭いて，閉封の準備をする．⑥　こちらでは新しい覆を裁ったり，端をくけたり，むこうでは錠前の手入れである．閉封前の何となくあわただしい風景．

元禄六年御開封行列絵巻

天保四年正倉院御開封記

⑤～⑩　元祿六年御開封行列絵巻．行列はものものしく，まず検使役の奈良奉行⑤が供揃えして進む⑥．次に東大寺の人々が数十人つづいた後，勅使が進む⑦．次に鑰箱を持つ僧侶を先にして東大寺長吏代理⑧．行列中には番匠（大工）⑨も，鍛冶⑩も加わる．①～④　天保四年正倉院御開封記．①の左から勅使，東大寺長吏代理，三綱，奉行の座．その席は，宝庫の前に建てられた仮屋に設けられる．②は警護の座で右方に與力同心，左方に槍などを擁して組の配下．用水桶も備えてある．宝物のしらべ③は，四聖坊（正倉院（一）8頁参照）で行われた．④は中倉前に座を占める神主たち．扉を開く前にお祓をする．

北倉が閉封される①．庫の内の点検②がすめば，鍵に縄をかけ③，御署名のある封を包紙に受け，麻縄に插む④．勅封を竹皮で護り侍従封をつける⑤．そして中倉の閉封⑦，閉封が滞なく済めば，鎮守の杉本社に詣で⑧，聖武天皇，光明皇后陵に参拝⑥曝涼の無事終了と次の１年間の安全を祈願する．こうして年に一度の大行事を終えた正倉院は，また秋がくるまで冬眠するとも見えよう．しかし今から‘日々発見’が始まる．未整理品の整理と修理，宝物の学術的調査など，もっと急いでよくまた一般の人々の宝物拝観をたやすくしてよいだろう．修理，研究室，展覧場設備の先駆として不燃焼の倉が建ちつつある．

# 岩波写真文庫目録

1＊木綿
2 昆虫
3＊南氷洋の捕鯨
4＊魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10＊紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19＊川—隅田川—
20 雲
21 汽車
22＊動物園の鳥
23 様式の歴史
24 銅山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大仏
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院（一）
41 彫刻
42 仏像
43＊化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47＊東京—大都会の顔—
48＊馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54＊水辺の鳥
55 米
56 正倉院（二）
57＊石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61＊波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65＊ソヴェト連邦
66 能
67＊造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90＊電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94＊自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97＊システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105＊宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110 写楽
111 熊
112＊東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126＊貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132＊日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136＊利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 仏教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる—空から—
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅—桑原武夫—
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本—1955年10月8日—
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ブラジル
206 ルーヴル美術館
207 北海道（南部）
208 小豆島
209 日本—1956年8月15日—
210 富山県
211 毛織物の話
212 北海道（東・北部）
213 自然と心
214 空からみた京都
215 世界の人形
216 愛知県
217 諏訪湖
218 鉄と生活
219 山口県
220 麦積山
221 北京
222 江南
223 四川
224 広州—大同
225 室蘭
226 山水画
227 三重県
228 白山
229 鵜飼の話
230 島根県
231 小さい新聞社
232 北海道（中央部）
233 近代建築
234 岡山県
235 ねずみの生活
236 札幌
237 日本—1957年4月7日—
238 広島県
239 北陸路
240 倉敷
241 ギリシアの神々
242 長崎県
243 水郷—潮来—
244 福井県
245 秋吉台
246 子供の絵
247 徳島県
248 十勝平野
249 岐阜県
250 青森県
251 中国の彫刻
252 熊本県
253 秋田県
254 苫小牧
255 山梨県
256 新潟県
257 村と森林
258 茨城県
259 福島県
260 旭川・大雪山
261 大阪府
262 奈良県
263 北アルプスの山々
264 地形の話
265 静岡県
266 軽井沢
267 佐賀県
268 日本の社寺建築
269 宮崎県
270 十和田湖
271 福岡県
272 日本—1958年正月—
273 宮城県
274 鳥取県
275 タイ—学術調査の旅—
276 インドシナの旅
277 栃木県
278 屋久島・種子島
279 岩手県
280 地中海の史蹟めぐり
281 兵庫県
282 キリスト

＊印は品切でございます

新刊

283 284 285 286

明日の正倉院